郡川遺跡

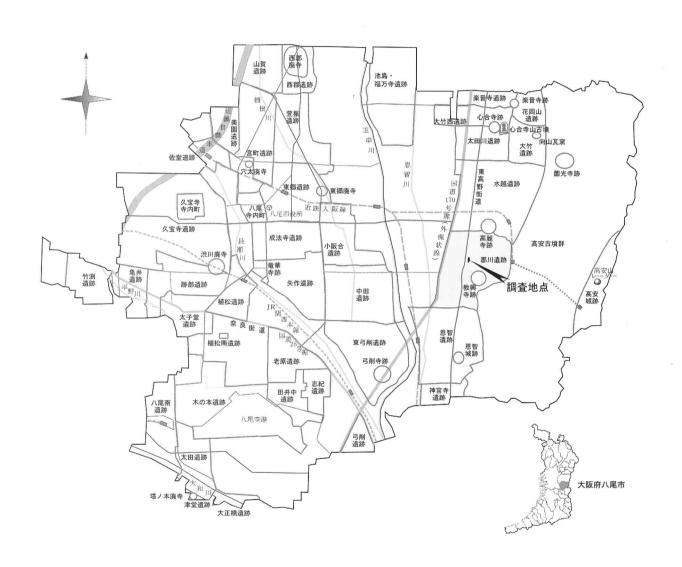
I 第6次調査 Ⅱ 第7次調査

型型 2009年 財団法人 八尾市文化財調査研究会



郡川遺跡

I 第6次調査 Ⅱ 第7次調査



2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

郡川遺跡は八尾市の東部、生駒山地のなかでも高安山の麓に広がる扇状地にあたります。 八尾市の東部の扇状地は古来より人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発に伴い各種土木工事が実施され、破壊され消滅する埋蔵文化財が存在します。それらに対して事前の発掘調査を実施し、記録保存をおこない、先人が残してくれた貴重な文化財を後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

郡川遺跡は過去の発掘調査で、縄文時代から近世に至るまでの生活跡を発見しています。

この度、平成19年度に実施いたしました保育所建設に伴う報告書を刊行する運びとなりました。本調査においては弥生時代後期および古墳時代後期の居住域、平安~鎌倉時代の生産域などの遺構が見つかりました。今回の調査成果は、山麓部から扇状地にかけての集落の実態を解明する一つの資料になります。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御指導ならびに御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会 理事長 岩崎 健二

- 1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成19年度に郡川遺跡内で実施した発掘調査の報告書を収録したものである。
- 1. 内業整理および本書作成の業務は、各現地終了後に着手し平成21年3月をもって終了した。
- 1. 本書に収録した各調査報告書の文責は以下の通りである。
 - I 木村健明·成海佳子
 - Ⅱ 西村公助
- 1. 全体の編集は西村が行った。
- 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1地形図(平成8年7月編纂)を基に作成した。
- 1. 本書で用いた図に付す高さの基準は東京湾標準潮位(T.P.)で、方位は国土座標第VI座標系の 座標北を示している。
- 1. 土色については、『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法 人日本色彩研究所色票監修を使用した。
- 1. 各調査に際しては、写真・実測図を作成している。市民の方々に広く利用されることを希望する。

次

はし	いがき こうしゅう こうしゅう こうしゅう こうしゅう こうしゅう こうしゅう こうしゅう
序	
I	郡川遺跡第6次調査(KR2007-6)・・・・・・・・・・・1
П	郡川遺跡第7次調査(KR2007-7) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
報告	音書抄録

I 郡川遺跡第6次調査(KR2007-6)

例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市黒谷一丁目56番1で実施した(仮称)新高安保育所建設に伴う造成工事 に伴う郡川遺跡第6次発掘調査(KR2007-6)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会の成海佳子が担当した。
- 1. 現地調査の期間は平成19年4月23日に着手し4月27日に終了した。調査面積は約44㎡である。
- 1. 現地調査においては、青山洋・飯塚直世・市森千恵子・岩沢玲子・中浜輝志・鷹羽侑太・村井厚三の参加を得た。(敬称略、五十音順)

内業整理は上記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年12月29日をもって終了した。

1. 本書の執筆は、第1章および第2章の出土遺物は木村健明が、それ以外は成海が行い、編集は木村が行った。

本文目次

第1章	位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 1
第2章	調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 5
第1節	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 5
第2節	節 調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 5
第3章	まとめ・・・・・・	• 12

挿 図 目 次

第1凶	調査地周辺凶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第2図	地区割図・・・・・・5
第3図	1 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第4図	1 区落込み11出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第5図	2 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第6図	2 区 7 層・ 8 層出土遺物実測図7
第7図	3 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第8図	3 区溝32出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第9図	4 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第10図	4 区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第11図	5 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第12図	5 区 7 層出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第13図	6 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第14図	7 区平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第15図	7 区落込み75出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	表目次
表 1 周	周辺の調査一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
	図版目次
図版 1	調査地全景 地形測量 1区人力掘削 1区1面全景 2区1面全景 2区2面全景
, ., .,	3区機械・人力掘削 3区1面全景
図版 2	4区1面遺構検出 4区1面全景 4区2面遺構検出・掘削 4区2面全景 4区3面
	全景 4 区北壁実測 5 区 1 面遺構検出・掘削 5 区 1 面全景
図版 3	6区1面全景 6区北壁 7区1面遺構検出・掘削 7区1面全景 7区2面遺構検出
	7区2面全景
図版 4	1 区落込み 11・2 区 7 層・8 層出土遺物 3 区溝 22・4 区 2 層・7 層・落込み 48・5
••••	区 7 層・ 7 区 落 込 み 75 出 十 遺 物

第1章 位置と環境

郡川遺跡は、八尾市の南東部に存在する縄文時代中期末~室町時代に至る複合遺跡で、地理的には、国道170号線から東側の扇状地一帯に位置する。現在の行政区画では郡川一~五丁目、教興寺一~七丁目、垣内一~五丁目、黒谷一~四丁目が遺跡の範囲である。当遺跡周辺は北に水越遺跡、東に高安古墳群、南に恩智遺跡が接しており、水越遺跡との境界には高麗寺跡、郡川遺跡内に教興寺跡が所在する。当遺跡内では八尾市教育委員会(以下市教委)と(財)八尾市文化財調査研究会(以下研究会)が発掘調査を実施しており、弥生時代から近世の遺構・遺物が検出されている。以下、隣接する水越遺跡の調査成果も含めて、周辺の歴史的環境について時代ごとに記述する。

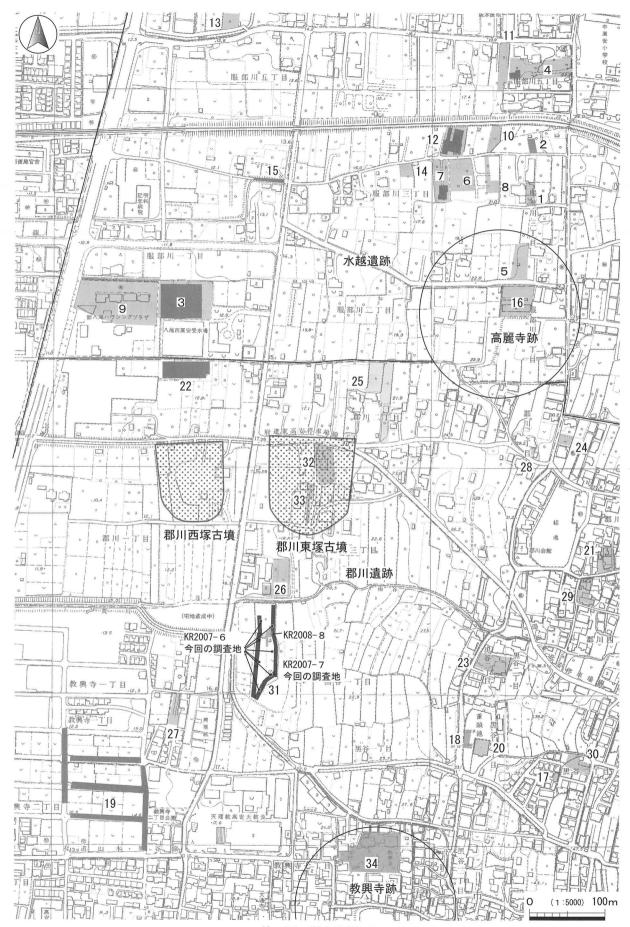
現時点では周辺で最も古い遺構・遺物は5(番号は第1図・表1に対応する。以下同じ)で検出された縄文時代中期末~後期中葉の遺構である。この調査成果によって、馬場川遺跡(東大阪市)と恩智遺跡の間の空白域を埋める集落が水越遺跡に存在したと考えることができるようになった。また7において縄文時代のピットが検出されている。遺構は確認されていないが、遺物は3(後期~晩期)・22(中期末)で出土している。現時点では5・7周辺と3・22周辺の2箇所に縄文時代の遺構が存在していると考えられる。

弥生時代に入ると、19で前期と中期の遺構、23で中期の遺構が検出されている。検出例が少ないため定かではないが、それぞれの調査区周辺に集落が存在したと考えられる。後期になると、遺構・遺物の検出される地点は急増し、第1図北東部(1・2・4・7・8・12・14)で溝や土坑など、西部の3で竪穴住居跡・土器棺など、今回報告する31で溝などをそれぞれ検出している。

3では竪穴住居の他に弥生時代後期末~古墳時代前期にかけての周溝墓も検出されており、居住地から墓域への変遷を窺うことができる。また検出された4基の周溝墓の内、2基が河内において当該期では少ない円形を呈する点が特筆され、出土土器の年代から円形から方形へと形態が変容した可能性も指摘されている。また遺物のみ出土している地点に東側の21・南西側の19がある。集落の規模やそれぞれの関連は不明であるが、水越遺跡南部から郡川遺跡にかけての範囲で弥生時代後期に活発な活動がおこなわれていたことが窺える。

古墳時代前期には先述した3の周溝墓以外は顕著な遺構が確認されていない。ただし19では前期~後期の水田を検出しており、19の周辺は耕作地として利用されていたようである。中期には17・18で溝を検出していることから、集落の中心が東側に移動したようである。17では、鞴の羽口、鉄滓、製塩土器、馬の歯などが出土しており、製鉄遺跡であった可能性が指摘されている。

後期に入ると、今回の調査地の北側100mに郡川東塚古墳および郡川西塚古墳が築かれる。いずれも前方後円墳で、郡川東塚古墳は、全長50m・後円部径25mと推定される。明治30(1897)年の開墾時に後円部に南に開口する両袖式の横穴式石室が存在することが確認されており、石室内から銅鏡・玉類・刀剣類などの副葬品が多数出土している。また、近年宅地開発に伴って墳丘が調査され(32・33)、良好な状態で遺存していた葺石や埴輪列を確認し、墳丘構築法の復元を確認することもできた。一方の郡川西塚古墳は、全長60m・後円部径30mと推定される。こちらも明治35(1902)年の開墾時に後円部に南に開口する左片袖式の横穴式石室が存在することが確認されており、石室内からは銅鏡・玉類・刀剣類などの副葬品が多数出土している。



第1図 調査地周辺図

表1 周辺の調査一覧表

遺跡名	番号	調査名	調査主体	調査年	文 献
	1	89-559	市教委	1990年6~7月	市教委 1991 『八尾市内遺跡平成 2 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 22
	2	MK91-4	研究会	1992年2月	研究会 1992 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』 財団法人八尾市文化財調査研究会報告 34
		94-663	市教委	1995年7月	市教委 1996 『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告34
	3	MK95-5	研究会	1995年10月~3月	研究会 2006 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 92』
		95-450	市教委	1995年10月	市教委 1996 『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I』 八尾市文化財調査報告 33
	4	MK96-6	研究会	1996年8~9月	研究会 1998 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 60』
	5	95-582	市教委	1996年5月	市教委 1997 『八尾市内遺跡平成 8 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 36
	6	99-342	市教委	1999年10月	市教委 2000 『八尾市内遺跡平成 11 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 42
1. 4st NationA-	7	MK00-7	研究会	2001年3月	市教委・研究会 2000 『八尾市立埋蔵文化財センター報告2 平成12年度』
水越遺跡	8	2001-97	市教委	2001年6月	市教委 2001 『八尾市内遺跡平成 13 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 46
	9	2002-79	研究会	2002年6月	市教委 2003 『八尾市内遺跡平成 14 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 48
	10	2003-233	研究会	2003年11月	市教委 2004 『八尾市内遺跡平成 15 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 49
	11	2004-37	研究会	2004年5月	市教委 2005 『八尾市内遺跡平成 16 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 50
	12	2005-322	研究会	2005年11月	市教委 2006 『八尾市内遺跡平成 17 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 53
		MK05-8	研究会	2005年12~1月	研究会 2006 『平成 17 年度(財) 八尾市文化財調査研究会事業報告』 (財) 八尾市文化財調査研究
	13	2006-162	研究会	2006年7月	大机工 000g 80 B大小地下河南 10 F 100g 49 8 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	14	2006-293	研究会	2006年11月	- 市教委 2007 『八尾市内遺跡平成 18 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 55
	15	MK06-9	研究会	2006年9月	研究会 2007 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 99』
高麗寺跡	16	2008-14	研究会	2008年7月	市教委 2009 『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 59
郡川遺跡	17	63-193	市教委	1988年9月	市教委 1989 『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書I』 八尾市文化財調査報告19
		89-399	市教委	1990年1月	市教委 1990 『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告21
	18	KR89-1	研究会	1990年2月	研究会 1997 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 57』
		89-032	市教委	1989年8月	市教委 1990 『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告 21
	19	K R 90-2	研究会	1990年5~8月	研究会 1999 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 64』
	20	90-105	市教委	1990年5月	市教委 1991 『八尾市内遺跡平成 2 年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告 23
	21	93-075	市教委	1993年7~8月	市教委 1994 『八尾市内遺跡平成 5 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 29
	22	KR94-3	研究会	1994年5~8月	研究会 2006 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 92』
	23	96-275	市教委	1996年9月	市教委 1997 『八尾市内遺跡平成 8年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 36
	24	98-400	市教委	1998年12月	市教委 1999 『八尾市内遺跡平成 10 年度発掘調査報告書 I 』 八尾市文化財調査報告 40
	25	2002-65	研究会	2002年11月	市教委 2003 『八尾市内遺跡平成 14 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 48
	26	2002-304	研究会	2003年9月	- · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	27	2003-219	研究会	2003年10月	一市教委 2004 『八尾市内遺跡平成 15 年度発掘關查報告書』 八尾市文化財調查報告 49
	28	2003-278	研究会	2004年9~10月	市教委 2005 『八尾市内遺跡平成 16 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 50

	29	2006-166	研究会	2006年9月	市教委 2007 『八尾市内遺跡平成 18 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 55
	30	2006-516	研究会	2007年4月	市教委 2008 『八尾市内遺跡平成 19 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 57
	·	KR 2007-6	研究会	2007年4~5月	本書
	31	K R 2007-7	研究会	2007年9~11月	本 查
		KR 2008-8	研究会	2008年9~10月	研究会 2008 『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 123』
*************************************	32	2000-306	市教委	2001年2~12月	市教委 2002『八尾市内遺跡平成 13 年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告 46
郡川東塚古墳	34	T2001KOH	研究会	2001年10~12月	市教委・研究会 2005 『八尾市立埋蔵文化財センター報告7 平成 17 年度』
坝	33	2002-153	研究会	2002年8月	市教委 2003 『八尾市内遺跡平成 14 年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告 48
教興寺跡	34	教興寺の調査	市教委	1983年2月	市教委 1983 八尾市內遺跡昭和 57 年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告 9

市教委-八尾市教育委員会 研究会-財団法人八尾市文化財調査研究会

古代には、2で奈良時代に埋没する河川、7で平安時代のピット・土坑が検出されているが、この地域で特筆されることは、高麗寺跡、教興寺跡などの寺院の存在である。高麗寺跡では、15において埋没河川内から瓦が出土したことから、上流に寺院跡が存在する可能性が指摘され、その上流部にあたる16で柱穴を検出し、瓦や土器が出土した。このことから、従来から想定されている範囲に寺院が存在した可能性が高くなっている。教興寺跡では、現在の教興寺の南側に位置する寺池内で3次にわたる調査がおこなわれ、飛鳥時代~中世の瓦が出土している。

中世には、19・29で室町時代の井戸、21で室町時代のピットが確認されている。その他に複数の地点(6・22・24)で溝が検出されているが、これは耕作地化していることを示すものと考えられ、特に22では島畠なども検出されている。

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市黒谷一丁目で行われた造成工事に伴うもので、当研究会が郡川遺跡内で実施した第6次調査(KR2007-6)である。調査で使用した標高値は、調査地北約250m地点の大阪府水準(II-2858 T.P.+16.871m)である。

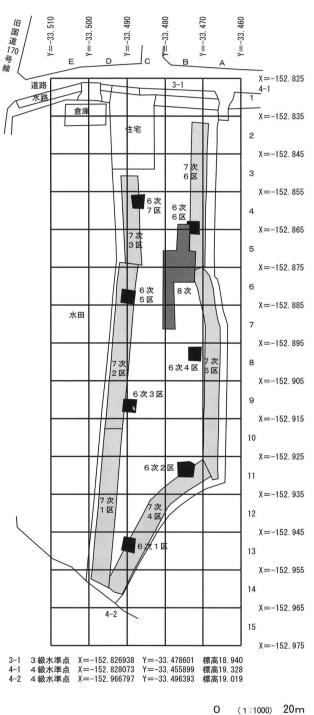
調査地は東西20~30m・南北130mの南北に長い敷地で、旧状は耕作地・植木畑で、地表面の高さは東が高く、比高は0.6m程度を測る。調査地内に調査区7か所を設定(南西から1~7区)し、南西端の1区から順次調査を行った。掘削については、現地表(T.P.+17~17.6m)下0.5m前後までを機械掘削、以下0.5m前後までを人力掘削として複数面の調査を行った。最終的に、さらに0.5m前後を機械掘削・人力掘削併用として、下層部分の堆積状況を確認した。写真撮影・図面作成などの記録保存については、随時行った。

第2節 調査の概要

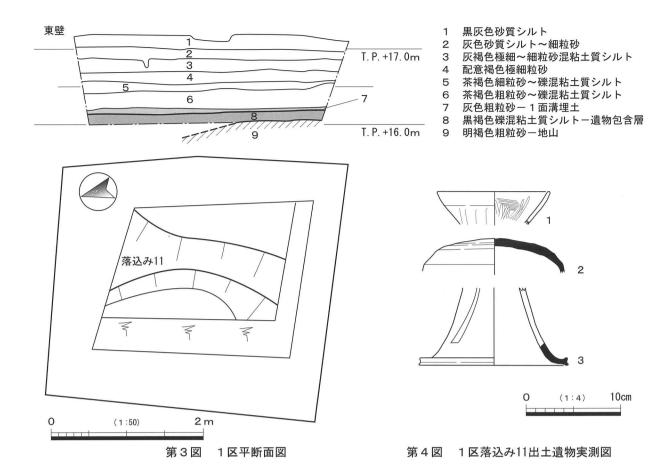
《1区》

1区の現地表面はT.P.+17.1m前後を測る。地表下1m前後で8層(黒褐色礫混粘土質シルト)に至る。この層上面(T.P.+16.2m前後)で南北方向の小溝を検出した(1面)。9層(明褐色粗粒砂・地山)上面(T.P.+16.0m前後)で落込み11を検出した(2面)。落込み内からは弥生時代後期の土器・古式土師器・須恵器などが出土した。1~3を図示した。1は土師器壺の口縁部である。生駒西麓産の胎土をもつ。2は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部境の稜は認められない。TK43型式か。3は須恵器高杯脚部である。長方形透かしをもつ。





第2図 地区割図



《2区》

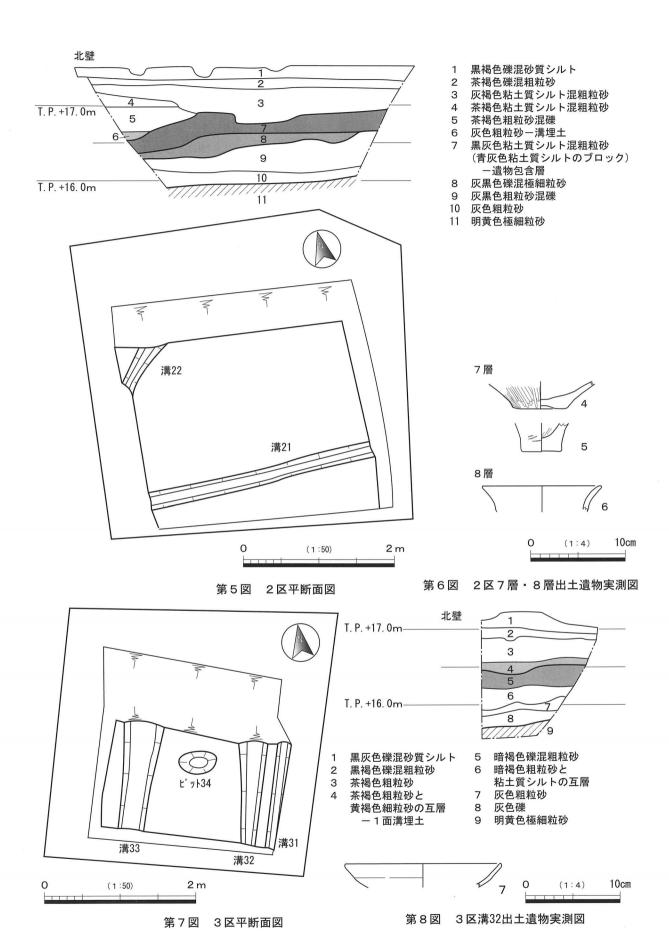
2区の現地表面はT.P.+17.5m前後を測る。地表下50~60cm前後で7層(黒灰色粘土質シルト 混粗粒砂)に至る。この層上面(T.P.+17.0m前後)で溝2条(溝21・22)を検出した(1面)。溝21は 調査区内を東西方向に横断するもので、長さ3.0mを検出し、幅20cmを測る。土師器・須恵器が出 土した。溝22は調査区北西隅で長さ70cmを検出したもので、幅20cmを測る。土師器杯が出土した。

7層は弥生時代後期の土器・古式土師器・須恵器などを含む。 4・5を図示した。ともに生駒西麓産の胎土をもつ平底の底部である。 4は中央がわずかにくぼむ。 8層(灰黒色礫混極細粒砂)上面(T.P.+16.5m前後)は、西に向かって傾斜している(第2面)。 8層は弥生土器・古式土師器を含む。6を図示した。6は土師器壺の口縁部である。9層(灰黒色粗粒砂混礫)上面(T.P.+16.4m前後)も西にむかって傾斜している(3面)。

以下は、10層 (灰色粗粒砂)・11層 (明黄色極細粒砂・地山) があり、地山上面は地表下1.6m (T. P. +16.0m) 前後を測る。

《3区》

3 区の現地表面はT. P. $+17\sim17.2$ mを測る。地表下 $50\sim60$ cm前後で5層(暗褐色礫混粗粒砂)に至る。この層上面(T. P. +16.5m前後)で溝 3条(溝 $31\sim33$)・ピット1個(ピット34)を検出した(1面)。溝はいずれも南北方向にのびるもので、幅は、溝31が20cm、溝32が $20\sim30$ cm、溝33が $35\sim50$ cmを測る。ピット34は長径50cm、短径30cmを測る。溝32からは土師器皿や須恵器が出土し、7を



図示した。7は土師器皿である。口縁部にヨコナデを施す。溝33からは須恵器、ピット34からは 土師器・須恵器が出土した。また5層中には弥生時代後期の土器、奈良時代~平安時代の土師器・ 須恵器・黒色土器を含む。6層(暗褐色粗粒砂と粘土質シルトの互層)は湧水が著しく、河川堆積 の可能性がある。

以下は7層(灰色粗粒砂)・8層(灰色礫)・9層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下 $1.2\sim1.3$ m(T.P. $+15.7\sim15.8$ m)前後を測る。

$\langle \langle 4 \boxtimes \rangle \rangle$

4区の現地表面はT.P.+17.5m前後を測る。2層中から出土した土師器皿(8)を図示した。復元口径8cmと小型である。地表下50cm前後で6層(茶褐色礫混砂質シルト)に至る。この層上面(T.P.+17.0m前後)で、ピット5個(ピット41~45)、溝1条(溝46)を検出した(1面)。いずれも調査区内では全体を検出できていない。ピット41から瓦器椀、ピット42・43から土師器、ピット44から弥生土器・土師器・須恵器、ピット45から土師器・製塩土器、溝46から弥生時代後期の土器・土師器・須恵器が出土している。1面のベース層である6層には、弥生時代後期の土器や、奈良時代の土師器・須恵器が含まれる。

7層上面(T.P.+16.8m前後)では、溝1条(溝47)を検出した(2面)。溝47は南北方向にのびるもので、長さ2.5mを検出し、幅15cmを測る。弥生土器が出土した。2面のベース層である7層(黒灰色礫混粗粒砂)には弥生時代後期の土器を含む。9を図示した。9は平底の底部で、生駒西麓産の胎土をもつ。

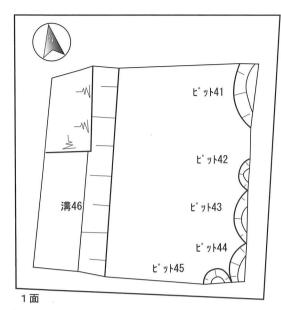
9層上面(T.P.+16.5m前後)では、落込み1か所(**落込み48**)を検出した(3面)。**落込み48**は北西方向に向かって落ち込む。深さは20cmを測る。内部からは弥生時代後期の土器が出土した。10~13を図示した。10は壺である。口縁端部は面をなし、凹線状にわずかにくぼむ。 $11 \cdot 12$ は平底の底部である。11は外面に右上がりのタタキ、内面にハケを施す。13は高杯脚裾部である。裾端部は上方に拡張し、面をなす。いずれも生駒西麓産の胎土をもつ。

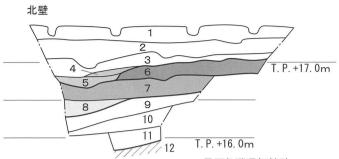
10層は黄褐色細粒砂と黒灰色細粒砂(炭混じり)のブロックであり、遺構埋土の可能性もある。 以下は11層(黒褐色粘土質シルト混礫)・12層(明褐色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下 1.5m(T.P.+15.9m)前後を測る。

《5区》

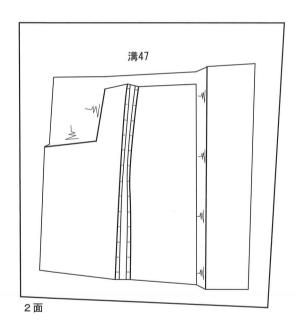
5区の現地表面はT.P.+17.1~17.2mを測る。地表下70cm前後で7層(黒褐色粘土質シルト)に至る。この層上面(T.P.+16.5m前後)で、溝4条(溝51~54)を検出した(1面)。溝はいずれも南北方向にのびるものである。溝53のみ調査区内で南端を確認しているが、それ以外は、南北とも調査区外にのびる。幅は、溝51が35cm、溝52が40cm、溝53が15cm、溝54が20~30cmを測る。溝53からは弥生土器、溝54からは弥生時代後期の土器や土師器・須恵器が出土した。1面のベース層である7層には弥生時代後期の土器を含む。14を図示した。14は平底の底部で、生駒西麓産の胎土をもつ。

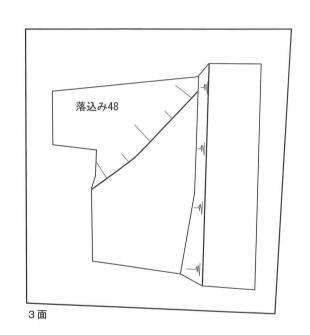
以下は8層(灰褐色砂質シルト)・9層(青黒色極細粒砂~砂質シルト)・10層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.5m(T.P.+15.5m)前後を測る。





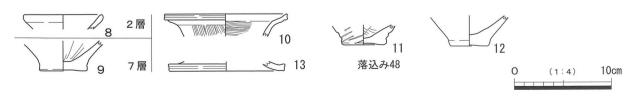
- 黒灰色礫混砂質シルト
- 9 黒灰色礫混粗粒砂
- 褐色礫混砂質シルト
- 10 黄褐色細粒砂と
- 3
- 灰褐色礫混砂質シルト 黒灰色細粒砂(炭)のブロ、 褐色礫混粗粒砂-1面溝46埋土 11 黒褐色粘土質シルト混礫 黒灰色細粒砂(炭)のブロック
- 灰色粗粒砂一1面溝46埋土
- 12 明褐色極細粒砂
- 茶褐色礫混砂質シルト 6
- 7 黒灰色礫混粘土質シルト
- 黒灰色粗粒砂-3面落込み47埋土



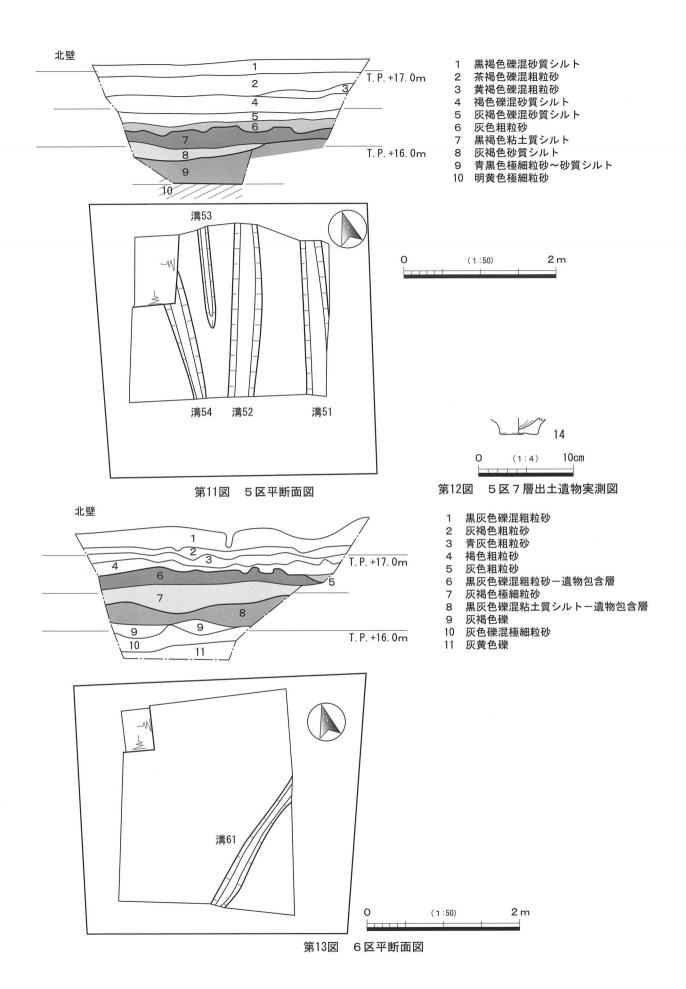


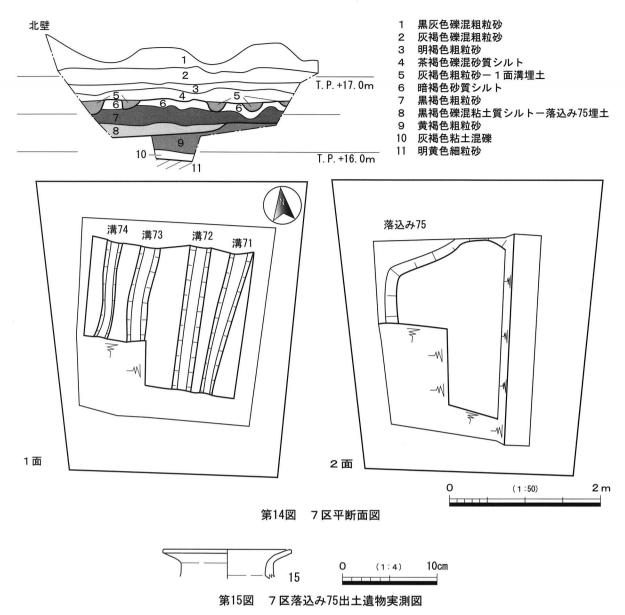
(1:50) 2 m

第9図 4区平断面図



第10図 4区出土遺物実測図





《6区》

6 区の現地表面はT. P. +17. 2~17. 5mを測る。地表下70cm前後で6層(黒灰色礫混粗粒砂)に至る。この層上面(T. P. +16. 8m前後)で、溝1条(**溝61**)を検出した(1面)。**溝61**は北東-南西方向にのびるもので、長さ2. 0mを検出し、幅20cmを測る。以下7層(灰褐色極細粒砂)、8層(黒灰色礫混粘土質シルト)が堆積しており、ともに弥生時代後期の土器が出土している。9層(灰褐色礫)は部分的な堆積であり、遺構埋土の可能性がある。

以下は10層(灰色礫混極細粒砂)、11層(灰黄色礫)、12層(灰黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.8m(T.P.+16.6m)前後を測る。6区からは図示できる遺物は出土していない。《7区》

7区の現地表面はT.P.+17.2~17.5mを測る。地表下70cm前後で6層(暗褐色砂質シルト)に至る。この層上面(T.P.+16.6m前後)で、溝4条(溝71~74)を検出した(1面)。いずれも南北方向の溝で、調査区外にのびる。幅は、溝71が20~30cm、溝72が25cm、溝73が25cm、溝74が15cmを測る。以下7層(黒褐色粗粒砂)が厚さ20~30cm程堆積し、9層(黄褐色粗粒砂)に至る。9層上面(T.P.+16.4m前後)では、北~西へ下がる落込み75を検出した。内部からは、弥生時代後期の土器

が出土し、15を図示した。15は壺の口縁部である。口縁端部は丸く収める。生駒西麓産の胎土をもつ。

以下は10層(灰褐色粘土混礫)、11層(明黄色極細粒砂・地山)があり、地山上面は地表下1.6~1.7m (T.P. +15.8m) 前後を測る。

第3章 まとめ

今回の調査では、1区あたりの面積は小さいながらも、広範囲にわたって遺跡の様相を明らかにすることができた。各調査区では、地表下 0.5~1.0m付近の1面相当層直上までは耕作地であったようで、1面で検出した溝群は農耕に伴うものと考えられる。1面のベース層には、土師器・黒色土器を含むことから、耕作地として開発されたのは奈良~平安時代以降であろう。

2面および3面は大半が落ち込みを検出したのみであったが、弥生時代後期~古墳時代後期の 遺物を含んでおり、各面の時期は、2面を古墳時代中~後期、3面を弥生時代後期に比定できる。

調査地の北方 200m付近には、古墳時代後期に造営された前方後円墳である郡川西塚古墳・郡 川東塚古墳があり、この時期の集落が近辺に存在した可能性を示唆している。

図 版





地形測量(北西から)



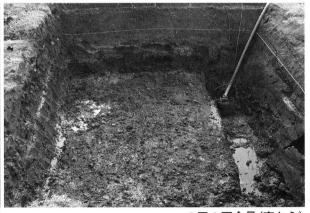
1区人力掘削(東から)



1区1面全景(南から)



2区1面全景(東から)



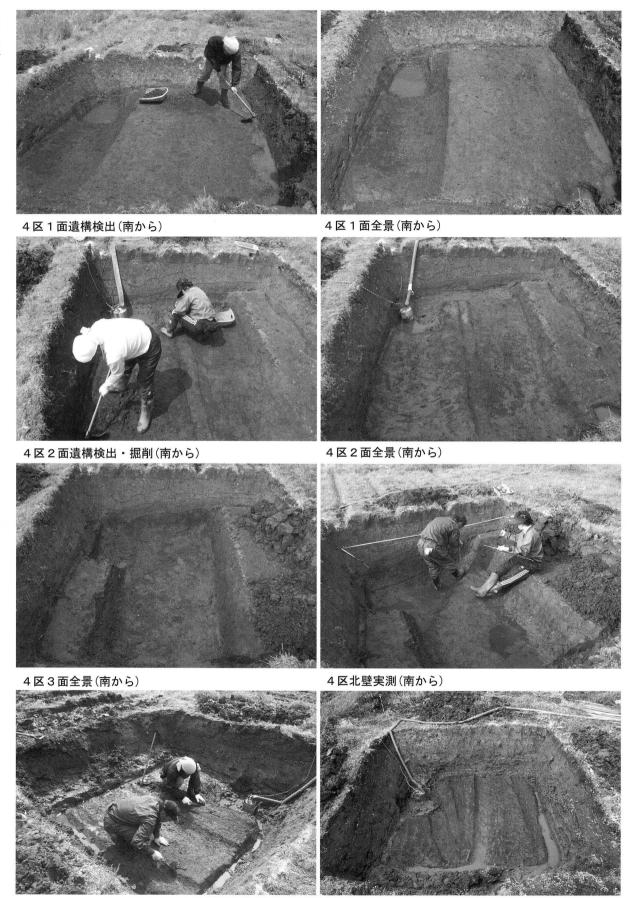
2区2面全景(東から)



3区機械・人力掘削(東から)



3区1面全景(南から)



5区1面遺構検出・掘削(北東から)

5区1面全景(南から)





6区1面全景(南から)

6区北壁(南から)



7区1面遺構検出・掘削(南東から)



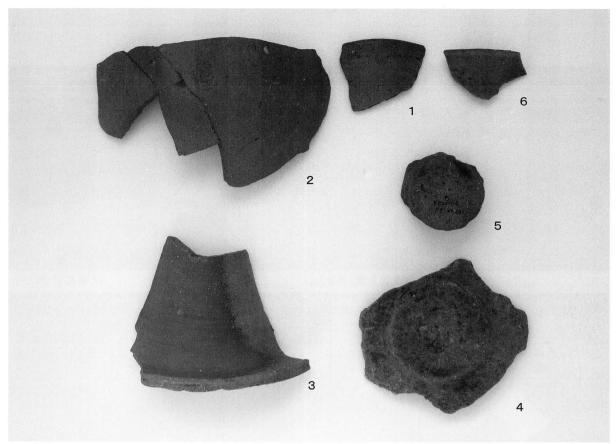
7区1面全景(南から)



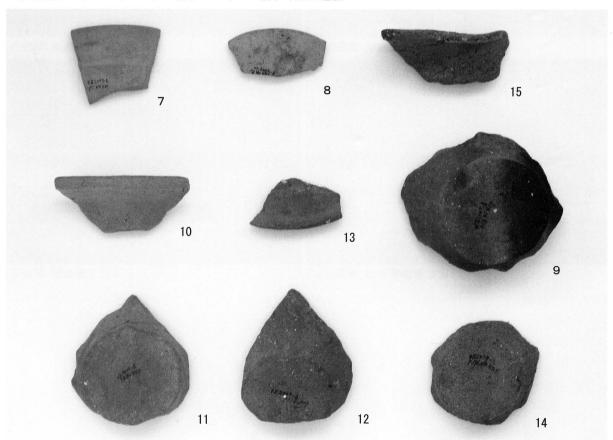
7区2面遺構検出(南東から)



7区2面全景(南から)



1区落込み11(1~3)・2区7層(4・5)・8層(6)出土遺物



3 区溝22(7)・4 区 2 層(8)・7 層(9)・落込み48(10~13)・5 区 7 層(14)・7 区落込み75(15)出土遺物

Ⅱ 郡川遺跡第7次調査(KR2007-7)

例言

- 1. 本書は、大阪府八尾市黒谷一丁目56番1で実施した(仮称)新高安保育所建設に伴う造成工事 に伴う郡川遺跡第7次発掘調査(KR2007-7)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会の西村公助が担当した。
- 1. 現地調査の期間は平成19年9月11日に着手し平成19年11月30日に終了した。調査面積は約851.2㎡である。
- 1. 現地調査には、阿部由美子・岩沢玲子・岩本順子・中村百合・吉川一栄の参加を得た。(敬称略、五十音順)

内業整理は下記が参加し、現地調査終了後に着手して平成20年12月29日をもって終了した。 遺物実測-赤松英幸・市森千恵子・永井律子・中村・中野一博・村井俊子・若林節子 遺構図面トレース-木村健明・西村、遺物図面トレース-市森、遺物写真撮影-木村・西村

- 1. 現地調査および本書作成にあたっては、八尾市教育委員会文化財課ならびに、財団法人八尾市文化財調査研究会職員の協力を得た。
- 1. 本書の執筆及び編集は西村が行った。

凡例

- 1. 遺構名は下記の通りに表示し、遺構番号の前に冠した。 土坑-SK、小穴-SP、溝-SD、河川-NR
- 1. 遺構番号は、遺構略号を付した後に3桁の算用数字で表現した。3桁の数字の内、上1桁は 遺構検出面を表し、それ以下の桁で遺構の検出番号を示す。
- 1. 遺物実測図の縮尺は、土器は1/4、石器は1/3に統一した。
- 1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。 弥生土器・土師器・瓦器-白、須恵器-黒
- 1. 出土遺物掲載番号のゴシック体算用数字は、土器を表す。数字の前のSは石器である。

本文目次

第	51章 調	查概要·····	13
	第1節	調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
	第2節	層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	13
	第3節	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	16
笙	2音 丰	L X	50

挿 図 目 次

第1図	$1 \sim 3$ 区断面図······14	第2図	$4\sim6$ 区断面図 $\cdots\cdots$ 15
第3図	1 区第 1 ∼ 3 面平面図 · · · · · · · · 17	第4図	1区SD203、SP302、SD301
			出土遺物実測図・・・・・・・19
第5図	2 区第 $1 \sim 3$ 面平面図 $\cdots \cdots 21$	第6図	2区NR302、5層
			出土遺物実測図・・・・・・・23
第7図	1 · 2 区 3 面 S P 301~312	第8図	3 区第 1 ∼ 4 面平面図・・・・・・・26
	平・断面図・・・・・・・・・・・25		
第9図	3区SD230平・断面図・・・・・・28	第10図	3区SD230出土遺物実測図(1)・・29
第11図	3 区 S D 230出土遺物実測図(2) ・・30	第12図	3 区 S D 230出土遺物実測図(3)・・31
第13図	3 区SD230出土遺物実測図(4) ・・32	第14図	$4 区第 1 \sim 3 面平面図 \cdots 40$
第15図	4 区SD235平・断面図・・・・・・・・42	第16図	4 ⊠ S D 134 · 140、 S K 202、 S D 235
			出土遺物実測図・・・・・・42
第17図	5 区第 1 ∼ 3 面平面図・・・・・・・45	第18図	5 区 S D 239平・断面図・・・・・・46
第19図	5区SD142・144・147、SD239、	第20図	6 区 S D 240平・断面図・・・・・・・47
	5層出土遺物実測図・・・・・・・・・46		
第21図	6 区第 1 ∼ 3 面平面図・・・・・・・48	第22図	6区SD240、NR101
			出土遺物実測図・・・・・・48
	表)次	
	X F	1 1/\	•
表 1	1 区第 1 面溝一覧表・・・・・・・・16	表 2	1区第2面溝一覧表・・・・・・・・・・・・17
表 3	1 区第3面小穴一覧表・・・・・・19	表 4	出土遺物観察表(1)20
表 5	2 区第 1 面溝一覧表	表 6	2区第2面溝一覧表・・・・・・22
表 7	2 区第 3 面小穴一覧表・・・・・・・23	表 8	2 区第 3 面河川一覧表・・・・・・・24
表 9	出土遺物観察表(2)24	表10	3区第1面溝一覧表・・・・・・26
表11	3 区第 2 面溝一覧表・・・・・・・28	表12	出土遺物観察表(3)33
表13	出土遺物観察表(4)34	表14	出土遺物観察表(5) ・・・・・・・・35
表15	出土遺物観察表(6) · · · · · · · 36	表16	出土遺物観察表(7)37
表17	3区第3面小穴一覧表・・・・・38	表18	3 区第 3 面溝一覧表・・・・・・・38
表19	4 区第 1 面溝一覧表	表20	4 区第2面土坑一覧表・・・・・・・39
表21	4区第2面小穴一覧表・・・・・39	表22	出土遺物観察表(8) ・・・・・・・・・・41
表23	4区第2面溝一覧表・・・・・・・・・・41	表24	5 区第 1 面溝一覧表・・・・・・・43
表25	5 区第 2 面溝一覧表・・・・・・・・・・・43	表26	出土遺物観察表(9) · · · · · · 44
表27	6 区第 1 面溝一覧表 · · · · · · · 49	表28	6 区第 2 面溝一覧表・・・・・・・49
表29	6 区第 3 面溝一覧表・・・・・・・・・・・49	表30	出十遺物観察表(10) ・・・・・・・・・・49

図 版 目 次

- 図版1 調査地遠景【河内平野を望む 中央矢印が調査地】(南東から) 調査地周辺【中央は生駒山地】(南西から) 調査前【左上は生駒山地】(北から)
- 図版2 1 区第1面(北から) 1 区第2面(北から) 1 区第3面(北から) 2 区第1面(南から) 2 区第2面(南から) 2 区第3面(南から) 1 区S P301~306検出状況(北西から) 2 区S P307~312検出状況(東から)
- 図版3 3区第1面(南から) 3区第2面(南から) 3区第3面(南から) 3区SD230(南西から)
- 図版4 3区SD230遺物出土状況(南西から) 3区SD230遺物出土状況(南から) 3区SD230遺物出土状況(南から) 3区SD230遺物出土状況(南から) 3区NR401(南東から)
- 図版 5 4 区第 1 面(北東から) 4 区第 2 面(北東から) 4 区第 3 面(北東から) 4 区 S D 235 (南から) 4 区 S D 235 遺物出土状況(南から) 5 区第 1 面(北から) 5 区第 2 面(北から) 5 区第 3 面(北から)
- 図版 6 5 区 S D 239 (西から) 5 区 S D 239 遺物出土状況(西から) 6 区第 1 面(南から) 6 区第 2 面(南から) 6 区第 3 面(南から) 6 区 S D 240 遺物出土状況(北から) 6 区 S D 240 遺物出土状況(東から)
- 図版7 SD301出土遺物
- 図版 8 SD230出土遺物
- 図版 9 SD230出土遺物
- 図版10 SD230出土遺物
- 図版11 SD230出土遺物
- 図版12 4区SK202、SD235、5区SD239、5層、6区NR101出土遺物

第1章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は保育所建設に伴うもので、研究会が郡川遺跡内で行った第7次調査にあたる。 調査は造成工事部分を対象に851.2㎡を行った。工事部分は南北に細長いため、調査地を6区に分けた。調査区は南西側を1区とし、北へ2・3区、南東側を4区とし北へ5・6区と呼称した(本書Iの第2図を参照)。調査にあたっては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約0.5 mを機械掘削し、以下0.8m前後の厚みの地層は人力掘削を行い、遺構の検出に努めた。また、面的な調査終了後、部分的に下層の確認を行った。

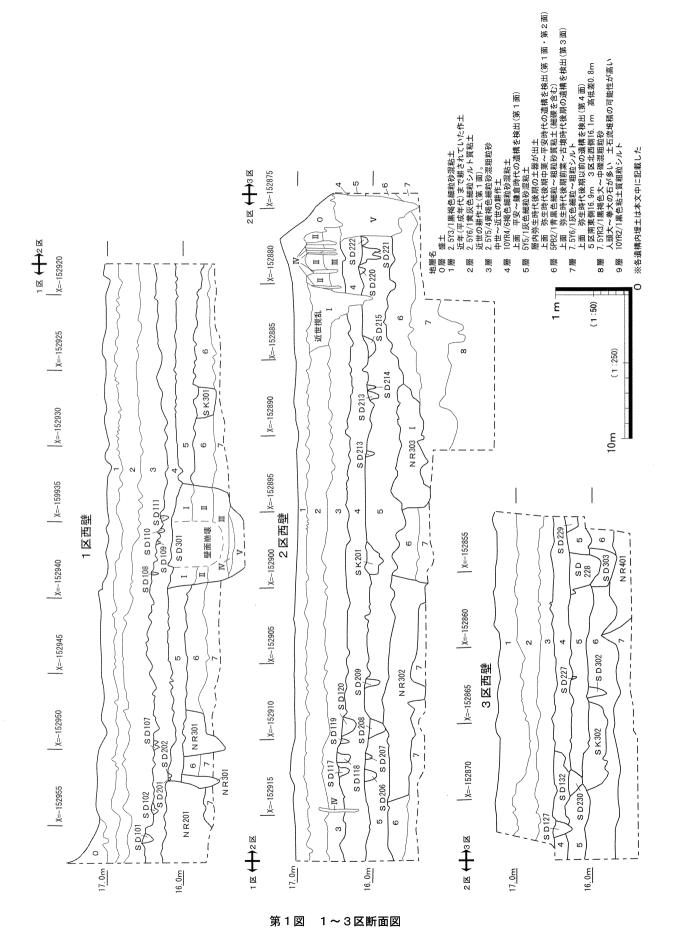
調査での地区割りは、調査地の北東に位置する国土座標第VI系座標点 (X=-152.825km、Y=-33.460km)を基点とし、本調査地を包括する東西50m、南北150mの範囲に10mメッシュを設定した。北東隅を基点として、東西方向をアルファベット(東から $A\sim E$)、南北方向を算用数字(北から $1\sim15$)で表し、1 A区 ~15 E区とした(本書 I の第 2 図を参照)。

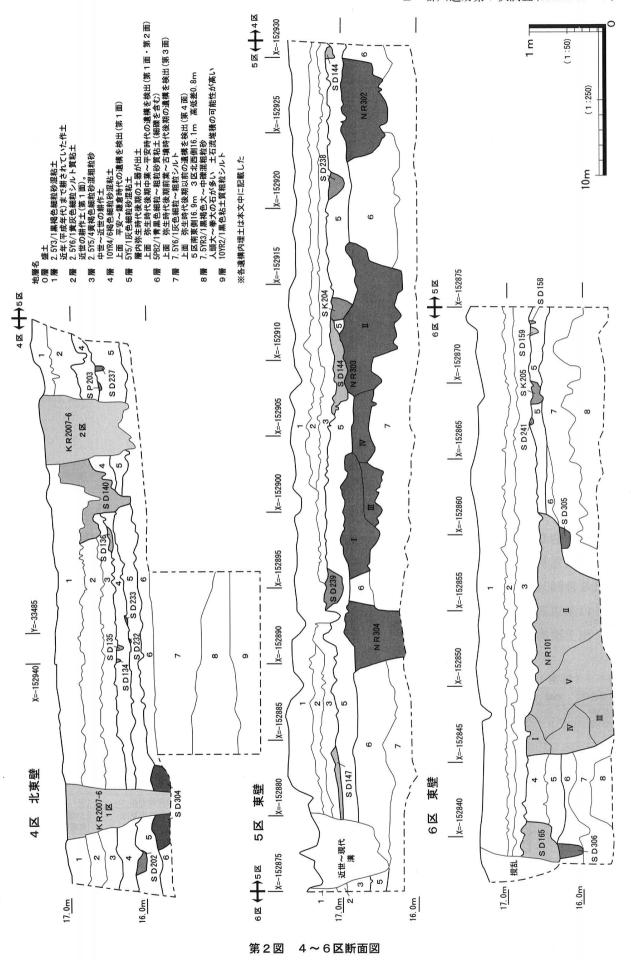
調査の結果、縄文時代〜鎌倉時代の遺構および遺物の検出があった。出土遺物はコンテナ(縦 0.6m×横0.4m×深さ0.2m)15箱である。

第2節 層序

調査地の現地表面の標高は、**5区**の南東側が17.7m、**3区**の北西側が17.2mを測り、南東から 北西へ低くなる地形であった。今回の調査では10層の基本層序を確認した。

- 0層 盛土。
- 1層 2.5Y3/1黒褐色細粒砂混粘土。近年(平成年代)まで耕されていた作土である。
- 2層 2.5Y6/1黄灰色細粒シルト質粘土。上面は撹拌を受け、土壌化している。近世に比定でき耕作土である(第1面)。
- 3層 2.5Y5/4黄褐色細粒砂混粗粒砂。中世~近世の耕作土と思われる。
- 4層 10YR4/6褐色細粒砂混粘土。上面は撹拌を受け、土壌化している耕作土である。平安〜鎌倉時代の遺構を検出した(第1面)。なお、5区と6区では4層の大部分が削られほとんど残っていない。したがって、同区で検出した遺構は5層上面で検出することとなった。
- 5層 5Y5/1灰色細粒砂混粘土で、層内からは弥生時代後期の土器が出土している。上面は土壌化 し、弥生時代後期中葉~平安時代の遺構を検出した(第1面・第2面)。
- 6層 5PB2/1青黒色細粒〜粗粒砂質粘土で、細礫を含む。上面は土壌化している。弥生時代後期 前葉〜古墳時代後期の遺構を検出した(**第3面**)。
- 7層 7.5Y6/1灰色細粒〜粗粒シルト。上面は土壌化している。弥生時代後期以前の遺構を検出した(**第4面**)。上面の標高は、**5区**の南東側が16.9m、**3区**の北西側が16.1mを測り、高低差は0.8mある。
- 8層 7.5YR3/1黒褐色大〜中礫混粗粒砂。人頭大〜拳大の石が多く、湧き水が多量にあった。土 石流堆積の可能性が高いと考えられる。
- 9層 10YR2/1黒色粘土質粗粒シルト。





第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第1面では、平安~鎌倉時代の溝65条(SD101~165)、近世の河川1条(NR101)を、第2面では、弥生時代後期中葉の土坑4基(SK202~205)、小穴5個(SP201~205)、溝9条(SD230・234~241)および、平安時代の土坑1基(SK201)、溝32条(SD201~229・231~233)、河川1条(NR201)を、第3面では、弥生時代後期前葉の土坑2基(SK301・302)、小穴14個(SP301~314)、溝4条(SD302・303・305・306)、河川4条(NR301~304)および古墳時代後期の溝2条(SD301・304)を、第4面では、弥生時代後期前葉以前の河川1条(NR401)を検出した。以下には各地区毎に検出した遺構および遺物を記載する。

1区

第1面

平安~鎌倉時代の溝13条(SD101~113)を検出した。

S D101~113

S D101~113は調査区のほぼ全域で検出した。このうち S D101・102は 4 区でも検出した。 S D101・102・108~111は東西方向に、S D103~107・112・113は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。 S D101~104・106・109・112からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。なお、検出した各溝の詳細は表 1 にまとめた。

筆2面

平安時代の溝 5 条(S D 201~205)、河川 1 条(N R 201)を検出した。

$s D201 \sim 205$

SD201~205は調査区のほぼ全域で検出した。このうちSD202は4区、SD204は2区でも検出した。SD201・202は東西方向に、SD203~205は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。各溝からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土した。このうち図化したものはSD203から出土した1である。

1 は須恵器杯蓋で、天井部は丸く、 $TK10\sim TK43$ 型式に比定できる。なお、各溝の詳細は表 2、出土遺物の詳細は表 4 にまとめた。

表 1 1区第1面溝一覧表

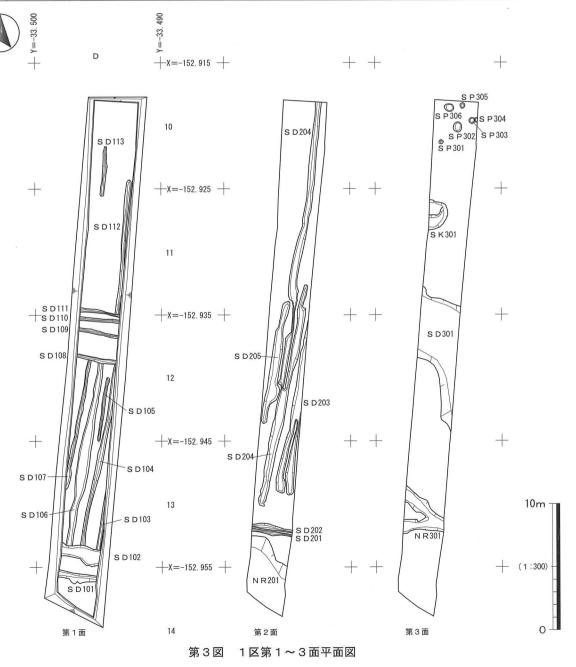
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D101	14C • D	東西方向に直線に伸びる。	0.6	逆台形	0.15	N4/0 灰色細粒~粗粒砂	土師器・須恵器
S D 102	13C • D	東西方向に直線に伸びる。SD 103・104・106を切る。	0. 75	逆台形	0.1	N4/0 灰色細粒~粗粒砂	土師器・須恵器
S D103	13D	南北方向に直線に伸びる。SD 102に切られる。	0. 2	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S D 104	12 · 13D	南北方向に直線に伸びる。SD 102・108に切られる。	0. 2	逆台形	0, 1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器
S D 105	12D	南北方向に直線に伸びる.	0. 2	逆台形	0.05	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S D 106	12 • 13D	南北方向に直線に伸びる。SD 102・108に切られる。	0.4	逆台形	0.1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・ 瓦質土器
S D 107	12 • 13D	南北方向に直線に伸びる。SD 108に切られる。	0. 2	逆台形	0. 1	10YR4/6褐色細粒砂混粘土	なし
S D 108	12D	東西方向に直線に伸びる。SD 106・107を切る。	0. 2	逆台形	0. 1	10YR4/1褐灰色細粒砂	なし
S D 109	12D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.1	10YR4/1褐灰色細粒砂	土師器・須恵器
S D110	12D	東西方向に直線に伸びる。	0.2	逆台形	0.1	10YR4/1褐灰色細粒砂	なし
S D111	11 · 12D	東西方向に直線に伸びる。SD 112を切る。	0. 3	逆台形	0. 15	10YR4/1褐灰色細粒砂	なし
S D112		南北方向に直線に伸びる。SD 111に切られる。	0. 25	逆台形	0. 1	10YR3/3暗褐色細粒砂混粘土	土師器
S D113	10 · 11D	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	逆台形	0.1	10YR3/3暗褐色細粒砂混粘土	なし

N R 201

13・14D区で検出した。検出した平面形状は南東~北西方向に直線に伸び、幅は5.8m以上を測る。断面形状は逆台形を呈し、深さは0.6m以上を測る。埋土はN3/0暗灰色細礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。

表2 1区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 201	13D	東西方向に直線に伸びる。	0. 15	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	須恵器
S D 202	13C • D	東西方向に直線に伸びる。	0.15~1.5	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	土師器・須恵器
S D 203	12 · 13D	南北方向に直線に伸びる。	0.9	逆台形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	土師器・須恵器
S D 204	7 ∼13C • D	南北方向に直線に伸びる。	0. 65	逆台形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	弥生土器・土師器
S D 205	11 · 12D	南北方向に直線に伸びる。	0. 45	逆台形	0. 1		土師器・須恵器・ 瓦器



第3面

弥生時代後期前葉の土坑 1 基(S K301)、小穴 6 個(S P301~306)、河川 1 条(N R301)および 古墳時代後期の溝 1 条(S D301)を検出した。

S K 301

11D区で検出した。検出した平面形状は半円形を呈し、径1.8mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.3mを測る。埋土は上から10YR2/1黒色粗粒砂混粘土、5Y4/1灰色細粒シルト質粘土で、遺物の出土はなかった。

$SP301\sim306$

 $SP301\sim306$ は北部で検出した。円形を呈し、径0.35~1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.08~0.35mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、 $SP301\sim303\cdot305\cdot306$ からは弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものは、SP302の2である。

2は甕で、弥生時代後期前葉に比定される。小穴のうちSP302・303とSP305・306は建物などを構築した柱穴になる可能性が高い。この小穴群は2区の南部でも検出した。なお、各小穴の詳細は表3、出土遺物の詳細は表4にまとめた。

N R 301

11 D地区で検出した。南東~北西方向に伸び、西側では南北 2 条に分かれている。幅2.5 mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5 mを測る。埋土は7.5 YR6/1 褐灰色細中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。なお、この遺構は4 区でも検出している。

S D 301

11・12 D地区で検出した。南東~北西方向に伸び、幅5.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ 0.5mを測る。埋土は上から I 7.5YR5/2灰褐色細粒砂混粘土、Ⅲ 10YR5/6黄褐色5細粒砂混粘土、Ⅲ 5Y3/1オリーブ黒色細粒砂混粘土、Ⅳ 5Y5/2灰オリーブ色細粒砂、V 10YR4/6褐色細粒砂混粘土で、Ⅲ~V層内からは古墳時代後期の土師器および須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは 3~20である。

3 は土師器甕で、口縁部は「く」の字に屈曲する。体部の内外面はハケナデを施す。 $4 \cdot 5$ は 土師器把手付鉢で、牛角状の把手部分である。 $6 \sim 10$ は須恵器杯蓋。 6 の天井部は丸みをもつが やや平坦である。 $7 \sim 9$ の天井部は丸い。 $11 \sim 17$ は須恵器杯身。 11 の底部外面にはヘラ記号がある。 $18 \sim 20$ は須恵器の高杯。 $18 \cdot 19$ は長脚の高杯で、 2 段にスカシを施す。 脚部の外面は回転カキメを施す。 これらの須恵器はT K $10 \sim T$ K 43 型式に比定でき、本遺構の時期は古墳時代後期中葉~後半である。 なお、出土遺物の詳細は表 4 にまとめた。

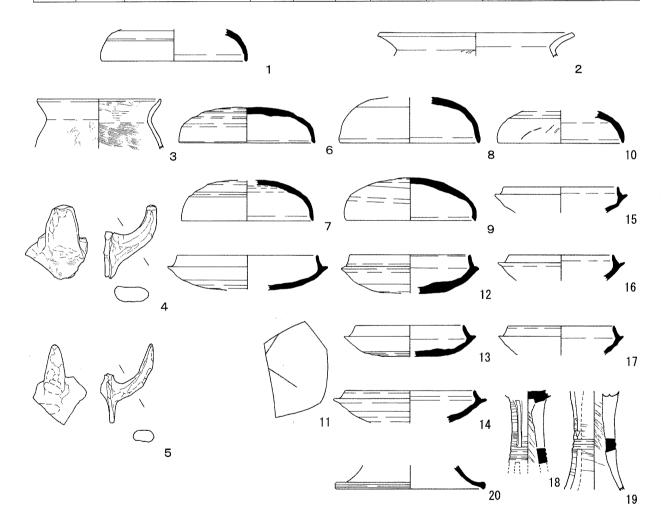
なお S D 301 は、5 層上面から切り込んでいることが断面観察の結果わかった。したがって、この遺構は2面に帰属する。

遺構に伴わない出土遺物

 $4\sim6$ 層からは土師器、須恵器、黒色土器などの破片が出土したが、図化できるものはなかった。

表3 1区第3面小穴一覧表

「応先の」	山小八一見衣							
地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
10D	円形			0.4	逆台形	0. 1		弥生土器
10D	円形			0. 65	逆台形			弥生土器
10D	円形	_	_	0. 4	逆台形			弥生土器
10D	半円形	_	_	0. 35	逆台形	0. 1	10YR2/1黒色細粒砂 混粘土	なし
10D	円形	-	_	0. 7	逆台形	0. 15	10YR2/1黒色細粒砂 混粘土	弥生土器
10D	円形	-		0.4	逆台形	0. 2	10YR2/1黒色細粒砂 混粘土	弥生土器
	地区 10D 10D 10D 10D 10D	10D 円形 10D 円形 10D 円形 10D 円形 10D 円形 10D 半円形	地区 平面形状 長径 (m) 10D 円形 — 10D 円形 — 10D 円形 — 10D 半円形 — 10D 円形 —	地区 平面形状 長径 (m) 短径 (m) 10D 円形 — — 10D 円形 — — 10D 半円形 — — 10D 円形 — —	地区 平面形状 長径 (m) 短径 (m) 径 (m) 10D 円形 - - 0.4 10D 円形 - - 0.65 10D 円形 - - 0.35 10D 円形 - - 0.7	地区 平面形状 長径 (m) 短径 (m) 径 (m) 每 (m) 断面形状 10D 円形 - - 0.4 逆台形 10D 円形 - - 0.65 逆台形 10D 円形 - - 0.35 逆台形 10D 円形 - - 0.7 逆台形 10D 円形 - - 0.7 逆台形	地区 平面形状 長径 (m) 短径 (m) 径 (m) 断面形状 深さ (m) 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.1 10D 円形 - - 0.65 逆台形 0.35 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.1 10D 半円形 - - 0.35 逆台形 0.1 10D 円形 - - 0.7 逆台形 0.15	地区 平面形状 長径 (m) 短径 (m) 径 (m) 断面形状 深さ (m) 埋土 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.1 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 円形 - - 0.65 逆台形 0.35 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.1 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 半円形 - - 0.35 逆台形 0.1 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 円形 - - 0.7 逆台形 0.15 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.2 10YR2/1黒色細粒砂混粘土 10D 円形 - - 0.4 逆台形 0.2 10YR2/1黒色細粒砂混粘土



S D 203 1 S P 302 2 S D 301 3 ~20 O (1:4) 10cm

第4図 1区SD203、SP302、SD301出土遺物実測図

表 4 出土遺物観察表(1)

表 4	- ш-	L 退 170 既	祭表(1					
遺物番号版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
1	S D 203	須恵器 杯蓋 口縁部		口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナデを施す。天井部内面は回転ナデ、外面は回転へラケズリを施す。口縁部外面にヘラ状工具による痕跡がある。		1 mm程度の砂粒を含む。	良好	
2	S P 302	弥生土器 甕 口縁部	口径20.3	口縁部は「く」の字に外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はナデ、外面は右上が りのタタキを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
3 7	S D 301	土師器 甕 口縁部	口径13.0	口縁部は「く」の字に外反する。端部はつまみ上げる。口縁部の内面はハケナデのちヨコナデ、外面はヨコナデを施す。体部の内面は横方向のハケナデ、外面は縦方向のハケナデを施す。	1 / / /	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
7	S D 301	土師器 把手付鉢 把手部		牛角状の把手部分である。把手部と体部の内外面はユビナデを 施し、指頭圧痕がある。	5YR6/6 橙色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
5 7	S D 301	土師器 把手付鉢 把手部		牛角状の把手部分である。把手部と体部の内外面はユビナデを 施し、指頭圧痕がある。		$1\sim3\mathrm{mm}\sigma$ 砂粒を含む。	良好	
6 7	S D 301	須恵器 杯蓋 口縁部	口径14.3	直立する口縁部。端部は内側に段を有す。天井部は平坦であるが、やや丸みがある。口縁部の内外面は回転ナデを施す。天井部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを施す。	5B5/1 青灰色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好	:
7	S D 301	須恵器 杯蓋 口縁部	口径13.9	内湾する口縁部。端部は丸く終わる。天井部は丸い。口縁部の 内外面は回転ナデを施す。天井部の内面は回転ナデ、外面は回 転へラケズリを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
8 7	S D 301	須恵器 杯蓋 口縁部	口径14.7	内湾する口縁部。端部は内側に段を有す。天井部は丸い。口縁 部の内外面は回転ナデを施す。天井部内面は回転ナデ、外面は 回転ヘラケズリを施す。		1 mm 程度の砂粒を含む。	良好	
9 7	S D 301	須恵器 杯蓋 口縁部		内湾する口縁部。端部は内側に段を有す。天井部は丸い。口縁 部の内外面は回転ナデを施す。天井部の内面は回転ナデ、外面 は回転へラケズリを施す。	5B6/1 青灰色	$1 \sim 2 \text{mm} \sigma$ 砂粒を含む。	良好	
10 7	S D 301	須恵器 杯蓋 口縁部	口径13.2	内湾する口縁部。端部は丸く終わる。口縁部の内外面は回転ナ デを施す。天井部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを 施す。口縁部にはヘラ記号がある。		1 mm程度の砂粒を含む。	良好	
11 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部		内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に 伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転 ナデを施す。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを 施す。杯部の外面にはヘラ記号がある。		$1 \sim 2 mm$ の 砂粒を含む。	良好	
12 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部	口径12.7	内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に 伸び丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転ナデを施 す。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転へラケズリを施す。		1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好	1
13 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部	口径11.4	内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に 伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転 ナデを施す。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転へラケズリを 施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
14 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部	口径13.6	内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部は水平に 伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は回転 ナデを施す。杯部の内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを 施す。		$1\sim 2$ mm の 砂粒を含む。	良好	
15 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部		ルグ・ 内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上 方に伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は 回転ナデを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	-
16 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部	口径10.9	内湾する 口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上 方に伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は 回転ナデを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
17 7	S D 301	須恵器 杯身 口縁部		内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。受部はやや上 方に伸び尖りぎみに丸く終わる。口縁部および受部の内外面は 回転ナデを施す。		1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好	
18 7	S D 301	須恵器 高杯 脚部		脚部は直立する。脚部の内面は、しばり目がある。外面は縦方 向のヘラミガキと回転カキメを施す。脚部には長方形のスカシ 孔が3方向あけられている。		1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好	
19 7	S D 301	須恵器 高杯 脚部		脚部は直立する。裾部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。脚部 の内面は、しぼり目がある。外面は回転カキメを施す。脚部に は長方形のスカシ孔が3方向あけられている。スカシ孔の部分 には逆三角形の記号文?が2箇所ある。凹線文を2条施す。		1 mm 程度の砂粒を含む。	良好	
20	S D 301	須恵器 高杯 裾部		裾部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。口縁端部は下方につま み出し、面を形成する。裾部内外面は回転ナデを施す。		1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好	

2区

第1面

平安~鎌倉時代の溝13条(SD114~126)を検出した。

S D114~126

SD114~126は全域で検出した。SD117~120は東西方向に、SD114~116・121~126は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。SD114からは、土師器・須恵器・瓦器、SD115からは須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表5にまとめた。

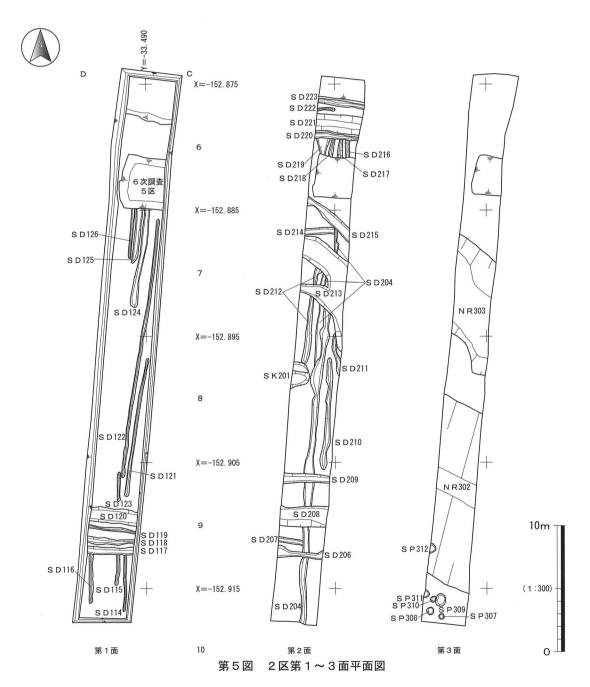


表 5 2 区第 1 面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D114		南北方向に直線に伸びる。 S D117 に切られる。	0. 2	逆台形	0. 1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	土師器・須恵器・ 瓦器
S D115		南北方向に直線に伸びる。 S D117 に切られる。	0. 25	逆台形	0. 1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	須恵器
S D116		南北方向に直線に伸びる。 S D117 に切られる。	0.3	逆台形	0. 1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D117	9 D	東西方向に直線に伸びる。 S D114~116 を切る。	0.6	逆台形	0. 13	10YR4/1 褐灰色細粒砂	なし
S D118	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0.5	逆台形	0. 17	10YR4/1 褐灰色細粒砂	なし
S D 119	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0. 17	10YR4/1 褐灰色細粒砂	なし
S D 120	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0. 95	逆台形	0.12	10YR4/1 褐灰色細粒砂	なし
S D 121	8 · 9C · D	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	逆台形	0.07	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D 122	$7 \sim 9 \mathrm{C} \cdot \mathrm{D}$	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	逆台形	0.1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D 123	9 D	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	逆台形	0. 05	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D 124	6 · 7C · D	南北方向に直線に伸びる。	0.5	逆台形	0. 1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D 125	6 · 7D	南北方向に直線に伸びる。	035	逆台形	0. 1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし
S D 126	6 · 7D	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	逆台形	0.1	10YR3/3 暗褐色細粒砂混粘土	なし

表6 2区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 204	7 ∼13C • D	南北方向に直線に伸びる。	0. 65	逆台形	0. 1	5Y4/1 灰色粗粒砂	土師器・須恵器
S D 206	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0.35~0.95	逆台形	0.1	5YR6/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D 207	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0. 45	逆台形	0.05	5YR6/1 褐灰色細粒砂混粘土	土師器
S D 208	9 D	東西方向に直線に伸びる。	1.6	逆台形	0. 2	5YR6/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D 209	9 D	東西方向に直線に伸びる。	0.8	逆台形	0.1	5YR6/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D 210	8 · 9D	南北方向に直線に伸びる。	0.3	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	なし
S D211	7 · 8C · D	南東〜北西方向に曲がる	0.4~0.7	皿状形	0.1	10YR5/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D212	7 · 8D	南北方向に直線に伸びる。	0. 3	逆台形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	弥生土器・土師器
S D213	7 · 8C · D	南東~北西方向に直線に伸び	A0. 5	逆台形	A0. 14	10YR5/1 褐灰色細粒砂混粘土	弥生土器・土師
		る。	B1. 5		B0. 15		器・須恵器
S D214	7 D	東西方向に直線に伸びる。	0. 5	逆台形	0. 15	5YR6/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D215	6 · 7C · D	南東〜北西方向に直線に伸び る。	0. 7	皿状形	0. 06	10YR5/1 褐灰色細粒砂混粘土	弥生土器
S D216	6 C	南北方向に直線に伸びる。	0. 3	皿状形	0. 07	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D217	6 C	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	皿状形	0.04	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D218	6 C • D	南北方向に直線に伸びる。	0. 25	逆台形	0.08	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D219	6 D	南北方向に直線に伸びる。	0.4~0.9	皿状形	0.08	10Y5/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 220	6 C • D	東西方向に直線に伸びる。	0.5	皿状形	0. 05	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 221	6 C • D	東西方向に直線に伸びる。	1.4	皿状形	0. 25	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 222	6C • D	東西方向に直線に伸びる。	0. 25	逆台形	0.1	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 223	6 C • D	東西方向に直線に伸びる。	0. 35	逆台形	0.14	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし

第2面

平安時代の土坑1基(SK201)、溝19条(SD204・206~223)を検出した。

S K 201

8 D地区で検出した。検出した平面形状は半円形を呈し、径2.0m以上を測る。断面形状は逆台形で、深さ0.23m以上を測る。埋土はN3/0暗灰色細粒砂混粘土で、土師器・須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

S D 204 ⋅ 206~223

SD204・206~223 は全域で検出した。SD206~209・214・220~223 は東西方向に、SD204・210・212・216~219 は南北方向に、SD211・213・215 は南東-北西方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。SD204・207・212・213・215 からは弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表6にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の小穴 6個(SP307~312)、河川 2条(NR302・303)を検出した。

S P 307~312

 $SP307\sim312$ は南部で検出した。平面形状は円形($SP307\cdot308\cdot310\sim312$)と楕円形(SP309)があり、径0.4 \sim 1.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.08 \sim 0.25mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、SP311からは弥生時代後期の遺物が出土したが図化できるものはなかった。

SP301~303の柱間は1.5mで、東西方向に並ぶ。SP302・305・308・311の柱間は1.5mで、南北方向に並ぶ。SP303・306・307・310の柱間は1.7mで、南北方向に並ぶ。SP309・312の柱間は4.0mで、南北方向に並ぶ。以上が建物などの構築物の柱穴になる可能性が高い小穴である。これらから、周辺に同時期の居住域があったと推測される。なお、各小穴の詳細は表7にまとめた。

NR302 · 303

NR302は南部で、NR303は中央で検出した。なおNR302・303は5区でも検出している。NR302からは弥生土器の破片が出土した。このうち図化したものは弥生時代後期に比定できる21である。

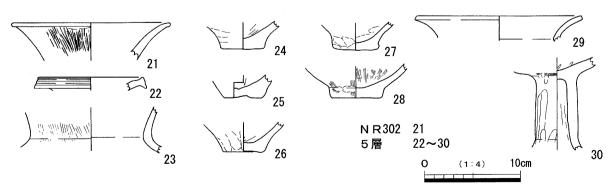
21は壺で、口縁部は外反し、外面には縦方向のヘラミガキを密に施す。なお、各河川の詳細は**表8**、出土遺物の詳細は**表9**にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

4層からは弥生土器、土師器、須恵器の破片が、5層からは弥生土器の破片が出土した。この うち図化したものは5層出土の弥生時代後期に比定できる22~30である。

表 7 2	区第	3面/	小穴-	一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径 (m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S P307	10D	円形	_	_	0.4	逆台形	0.08	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P 308	10D	円形	_	_	0. 55	逆台形	0.1	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P309	10D	楕円形	1.0	0. 7		逆台形	0. 17	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P310	10D	円形	_	-	0. 45	逆台形	0.1	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P311	10D	円形	_	_	0.6	逆台形	0.18	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	弥生土器
S P312	9 D	円形	_	_	0. 7	逆台形	0. 25	10YR2/1 黒色細粒砂 混粘土	なし



第6図 2区NR302、5層出土遺物実測図

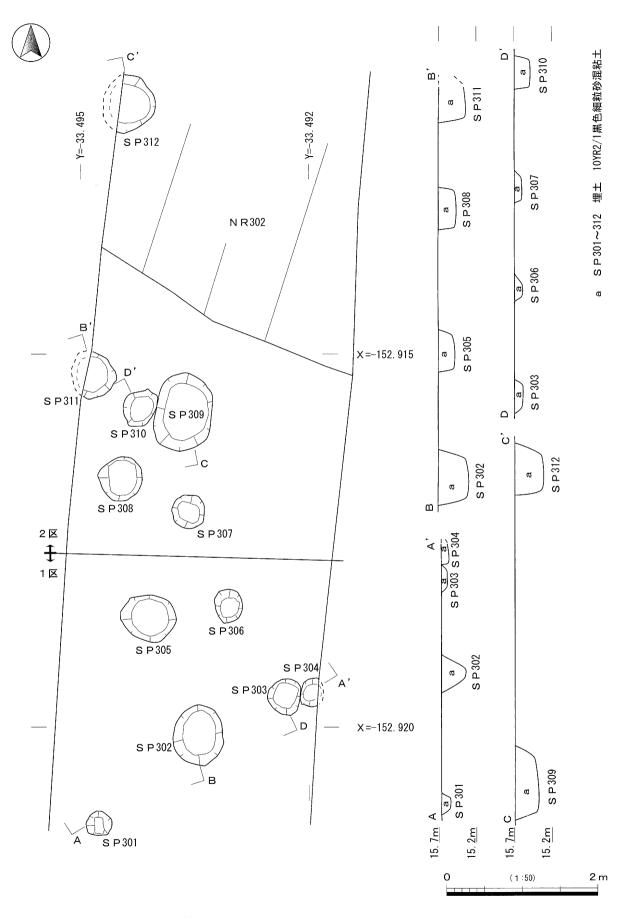
 $22 \cdot 23$ はの壺の口縁部で、22の端面には凹線文を施す。 $24 \sim 28$ は壺の底部で、25は突出する上げ底である。29はの甕の口縁部である、30は高杯の脚部で、柱状を呈し、中空である。河内V-3様式頃に比定できる。 $26 \sim 30$ は角閃石を多く含む生駒西麓産の土器である。なお、出土遺物の詳細は \mathbf{x} 9にまとめた。

表8 2区第3面河川一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
N R 302	8 ∼10D	南東-北西に直線に伸びる。	2区13.5 5区5.0	逆台形	0. 55	5YR3/6 暗赤褐色細~中礫混粗粒	弥生時代後期の土
						砂	器
N R 303	7 · 8C · D	南東-北西に直線に伸びる。	2区6.5 5区20.0	逆台形	0. 5	10YR4/1 褐灰色粗粒砂混細礫	なし

表9 出土遺物観察表(2)

表 9	Щ.	這物観	余衣 (4 /					
遺物 番号 阪 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
21	N R 302	弥生土器 壺 口縁部		口縁部は外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面はナデ、 外面は縦方向のヘラミガキを密に施す。	7. 5YR5/8 明褐色	$1 \sim 3 \mathrm{mm} \mathcal{O}$ 砂粒を含む。	良好	
22	5層	弥生土器 壺 口縁部		口縁部は外反する。端部は上下に拡張し端面を形成する。口縁 部の内外面はヨコナデを施す。端面には凹線文を施す。	10YR7/4 にぶい黄 橙色	$1 \sim 3 \mathrm{mm} \mathrm{o}$ 砂粒を含む。	良好	
23	5層	弥生土器 壺 口縁部		口縁部は外反する。口縁部の内面はヨコナデ、外面はハケナデ のちヨコナデを施す。体部内外面ナデを施す。	10YR5/6 黄褐色	$1 \sim 2 \mathrm{mm} \sigma$ 砂粒を含む。	良好	
24	5層	弥生土器 壺 底部		底部は突出する平底である。体部の内面はナデを施し、内面の 底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面はユビナデを施 す。		í	良好	
25	5層	弥生土器 壺 底部	底径3.9	底部は突出する上げ底である。体部の内面はナデを施し、内面 の底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面はナデを施す。			良好	
26	5層	弥生土器 壺 底部	底径5.0	底部は突出する平底である。体部の内面はハケナデを施す。外 面は縦方向のヘラミガキを施す。	10YR4/6 褐色	1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃さ を多く含む 生駒西麓産)		
27	5層	弥生土器 壺 底部	底径4.0	底部は突出する平底である。体部の内面はナデを施し、内面の 底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面はユビナデを施 す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃る を多く含む 生駒西麓産)		
28	5層	弥生土器 壺 底部	底径4.8	底部は突出する平底である。体部の内面はユビナデを施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面はユビナデを施す。		1		
29	5層	弥生土器 甕 口縁部	口径17.2	口縁部は外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。 ・	10YR4/6 褐色	1 mm程度の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		-
30	5層	弥生土器 高杯 脚部		脚部は直立する。裾部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。杯部の内外面はヘラミガキを施す。脚部の内面はしぼり目がある。 外面は縦方向のヘラミガキを施す。	10YR4/6 褐色	1 ~ 2 mmの 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		



第7図 1・2区3面SP301~312平·断面図

3区

第1面

平安~鎌倉時代の溝7条(SD127~133)を検出した。

S D127~133

SD127~133は調査区の全域で検出した。SD128~133は東西方向に、SD127は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。各遺構内からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表10にまとめた。

表10 3区第1面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 127		東西方向に直線に伸びる。SD 128・129・131・132 を切る。	0. 9	逆台形	0. 2	5Y5/1 灰色細粒砂	なし
S D 128		南北方向に直線に伸びる。SD 127 に切られる。	0. 3	逆台形	0.08	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 129		南北方向に直線に伸びる。SD 127 に切られる。	0. 45	逆台形	0. 12	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 130	3 · 4 C	南北方向に直線に伸びる。	0. 3	逆台形	0.05	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 131	50.0	南北方向に直線に伸びる。SD 127 に切られる。	0. 6	逆台形	0. 13	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 132		南北方向に直線に伸びる。SD 127 に切られる。	0. 75	逆台形	0. 13	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 133	3 · 4D	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.05	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし

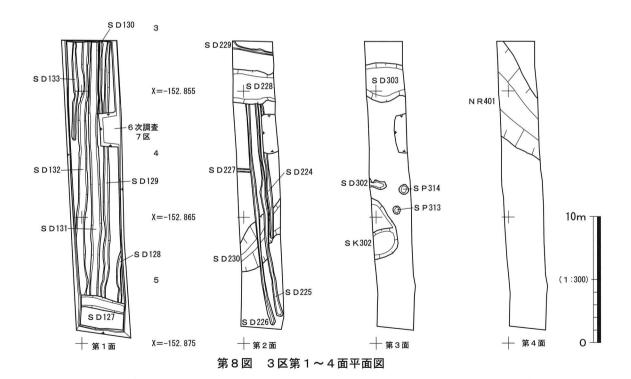


- Y=-33. 490

C X=-152.845

+

-



第2面

平安時代の溝6条(SD224~229)、弥生時代後期の溝1条(SD230)を検出した。

S D 224~229

SD224~229は調査区の全域で検出した。SD227~229は東西方向に、SD224~226は南北方向に伸びる。これらは耕作に伴うものと考えられる。各遺構内からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表11にまとめた。

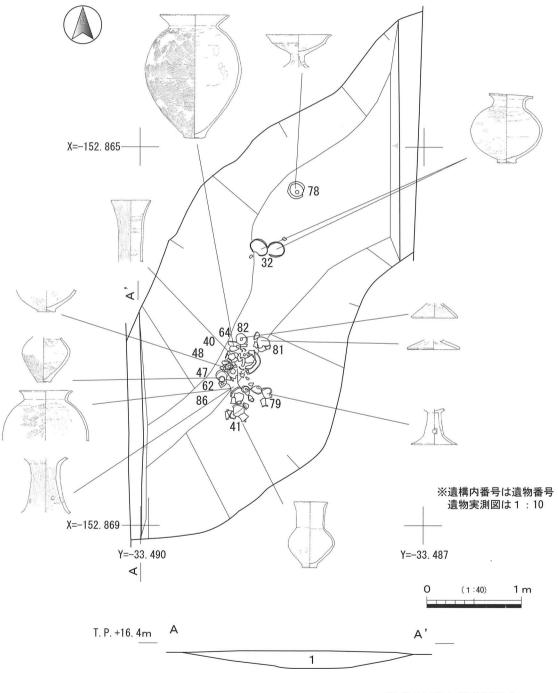
S D 230

調査区の南部で検出した。溝のほぼ中央では、弥生時代後期中葉の河内 $V-3\sim VI-1$ 様式に 比定できる土器が折り重なるように多量(コンテナ10箱程度)に出土した。土器には完形品および、 ほぼ完形に復元可能なものがあった。このうち図化したものは $31\sim 89\cdot S1$ である。

31~51は壺である。31~37は広口壺で、32・33は体部最大径が口径を上回る。34の口縁端部 には凹線文を施す。37の口縁端部にはキザミ目を施す。40は細長い頸部から外反する口縁部が付 く細頸壺で、河内V-3様式に比定できる。41~43・45・46は長頸壺である。41は完形品で、口縁 部は直線的に外側に開く。42の口縁部外面にはヘラ描きの鋸歯文を施す。43の口縁部は受口状を 呈する。51は体部の破片で、全体の形状は不明なものである。壺として報告するが、鉢の可能性 も考えられる。52~69は甕である。52の体部中位には焼成後に1ヶ所の孔があけられている。58・ 63.68は外面に施すタタキの角度が下位と上位で異なる。61の体部中位には焼成後に孔が2ヶ所あ けられている。体部の下位の外面は右上がりのタタキを施すが、中~上位は右上がりのタタキを 施したのちユビナデにより丁寧にタタキを消している。64は体部を分割して成形しており、外面 には成形時の粘土接合の痕跡が残っている。また、タタキの角度が下位、中位、上位で異なって おり、3分割による成形を行っていることが判った。66~68の口縁部は受口状を呈し、河内Vー 3様式に比定できる。52と64の底部は上げ底である。69の体部は縦長の器形で、口縁端部は上下 に拡張した面に凹線文を施す。体部の内面はヘラケズリを、外面は左上がりと縦方向のハケナデ を施す。この甕は、河内で出土する一般的なタタキ甕とは器形および調整が異なっている。器形 および調整が似ているものには阿波V-3様式の甕が挙げられ(菅原 2000)、他地域からの搬入 品である可能性が高い。70・71は鉢。70の口縁部は受口状を呈するやや大形品である。71は小形 である。72・73は有孔鉢で、底に貫通する孔が1箇所あいている。74~82は高杯。74~78は外反 する口縁部をもつ。74の口縁部外面には凹線文を3条施す。78の脚部は短い。83~86は器台。83 の口縁部端面には波状文を施す。84・85のスカシ孔は裾部と脚部の境と脚部の中位に施す。87は 手焙形土器で、体部の下位と口縁部に突帯を1条施す。88・89はミニチュア土器。S1は砥石で、 使用したと思われる平らな面が4面認められた。なお、遺構の詳細は表11、出土遺物の詳細は表 **12~16**にまとめた。

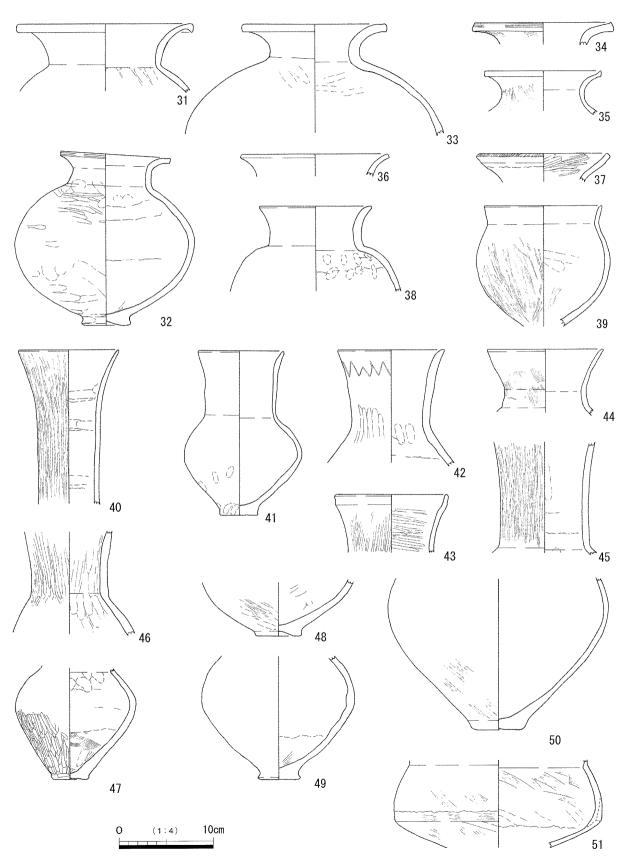
表11 3区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 224	4 · 5C	南北方向に直線に伸びる。	0. 45	逆台形	0.18	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 225	4 · 5C	南北方向に直線に伸びる。	0.4	逆台形	0.1	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 226	4 · 5C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.05	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 227	4 C • D	東西方向に直線に伸びる。	0.3	逆台形	0.08	10Y4/1 灰色細粒砂混粘土	なし
S D 228	3 · 4 C · D	東西方向に直線に伸びる。	2.6	逆台形	0. 2	5B4/1 暗青灰色細粒砂混粘土	なし
S D 229	3 C • D	東西方向に直線に伸びる。	0. 25	逆台形	0.1	10Y4/1 灰色細粒砂	なし
S D 230	4 · 5C · D	南西~北東方向に直線に伸び	2.5	皿状	0.18	N3/0 暗灰色細粒砂混粘土	弥生土器
		る。					

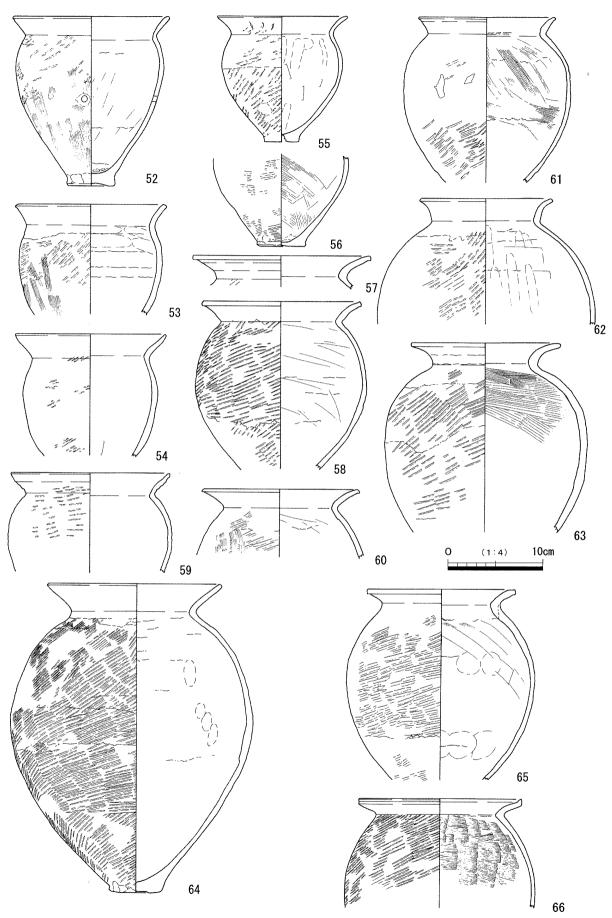


1 N3/0暗灰色細粒砂混粘土

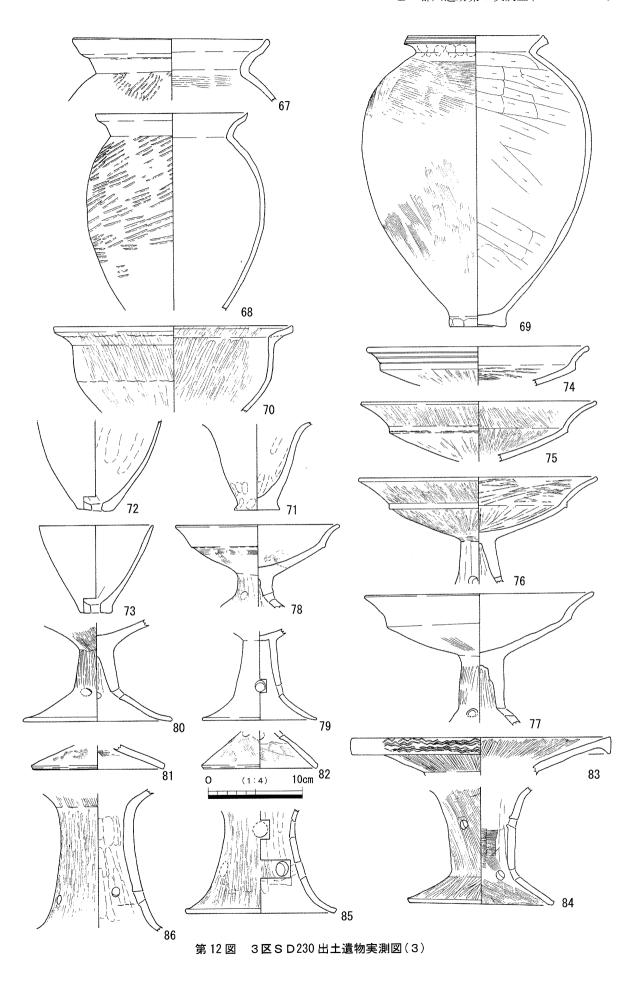
第9図 3区SD230平·断面図

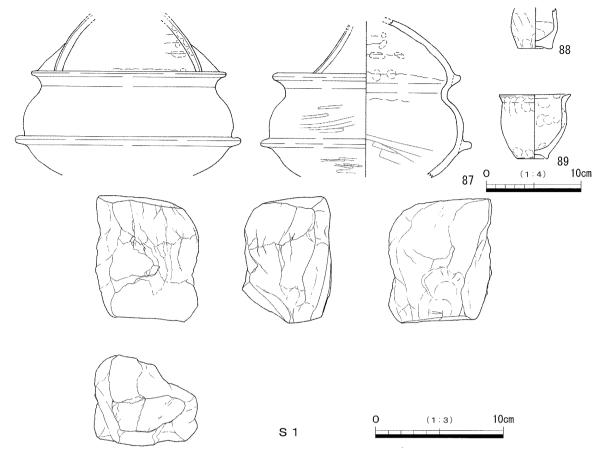


第10図 3区SD230出土遺物実測図(1)



第11図 3区SD230出土遺物実測図(2)





第13図 3区SD230出土遺物実測図(4)

第3面

弥生時代後期前葉の土坑 1 基 (S K 302)、小穴 2 個 (S P 313・314)、溝 2 条 (S D 302・303) を検出した。

S K 302

4・5 C・D地区で検出した。遺構の西側は調査区外に至る。検出した平面形状は半円形を呈し、南北幅は4.5mを測る。断面形状は北に段をもつ逆台形で、深さ0.4mを測る。埋土は上からN3/0暗灰色細粒砂混粘土 10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土で、弥生土器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

S P 313 · 314

調査区のほぼ中央で検出した。小穴の間隔は1.8mを測り、これらは、建物などの施設に伴う柱穴である可能性が高いと考えられる。各小穴からの遺物の出土はなかった。なお、各小穴の詳細は表17にまとめた。

S D 302 · 303

SD302は調査区の中央で、SD303は北部で検出した。東西方向に伸び、溝からの遺物の出土はなかった。なお、各溝の詳細は表18にまとめた。

表12 出土遺物観察表(3)

表12		上遺物観察	祭表(3)					
遺物 番号 図版	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
1 1			(OIII)					
番号 31	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	·	口縁部は体部から屈曲し直立ぎみに外へ伸びた後外反する。端 部は下方へつまみ出し面を形成する。口縁部内外面はヨコナデ を施す。体部の内外面はユビナデを施す。口縁部外面には部分 的に赤色顔料を塗布している。口~体部の内外面には部分的に 黒斑がある。		1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)	良好	
32 8	S D 230	壺 口縁部	器高 18.4 底径 5.1 体部最大	底部は突出する上げ底である。体部は横長の球形である。口縁 部は屈曲し外反する。端部は面を形成する。体部の内面はナデ を施し、内面の底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面は 横方向のヘラミガキのちユビナデを施す。口縁部は内外面とも にヨコナデを施す。端部には凹線文を施す。体部の外面には、 赤色顔料を部分的に塗布している。	色 外面10YR4/6	1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
33 8	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 15.3	体部は横長の器形になると思われる。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は下方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内外面はユビナデを施す。		1 ~ 4 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
34 8	S D 230	弥生土器 壺 □縁部	口径 14.2	口縁部は外反する。端部は上下につまみ出し面を形成する。口 縁部の内面はヨコナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。端 部には凹線文を施す。	7.5YR8/6 浅黄橙 色	1 ~ 2 mmの 砂粒を含む。	良好	
35	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 12.25	口縁部は体部からゆるやかに曲がり外反する。端部は上方へつまみ出し面を形成する。口縁部内面はヨコナデ、外面は左上がりのハケナデのちョコナデを施す。体部の内外面はユビナデを施す。		1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
36	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 15.2	口縁部は屈曲し外反する。端部は面を形成する。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。端面には外面に凹線文を施す。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
37 8	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 13.2	口縁部は内湾する。端部は面を形成する。口縁部の内面は右上がりのヘラミガキ、外面はヨコナデを施す。口縁部外面には凹線文、端面には刻み目を施す。		1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
38 8	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 11.6	体部は欠損しているが、球形になると思われる。口縁部は体部 からゆるやかに曲がり直立ぎみに外へ伸びる。端部は外につま み出し丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデを施す。体部の内 面はユビナデを施し、粘土接合の痕跡がある。外面はユビナデ を施す。		1 ~ 5 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
39 8	S D 230	壺	体部最大	体部は球形である。口縁部は体部からゆるやかに曲がり直立ぎ みに外へ伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部内外面 はヨコナデを施す。体部の内外面は縦方向のヘラミガキ後、ユ ビナデを施す。	ī	1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
40 8	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 10.4	#細長い頸部から口縁部は外反する。端部は丸く終わる。口頸部の内面はユビナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。	310YR 7 /4 にぶい 黄橙色	1 ~ 2 mm の 砂粒を含む。	良好	
41 8	S D 230	弥生土器 壺 完形	器高 12.4 底径 3.75 体部最为 径 12.25		Ž	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
42 8	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 11.	口縁部は体部からゆるやかに曲がり直立ぎみに外へ伸びる。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内面は横方向のヘラミカキのちヨコナデを施す。口縁部の外面の上位は左上がりのハクナデのちヨコナデを施す。下位は縦方向のヘラミガキを施す。体部の内面はユビナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。体部の内面には粘土接合の痕跡がある。口縁部の外面にはヘラ枯きの鋸歯文を施す。口~体部の外面には部分的に黒斑がある。	7	砂 粒 を 含む。(角閃不を多く含む 生駒西麓産)	P	
43	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 11.	7 口縁部は直線的に上外方へ伸びる。端部は上方につまみ出し丸 く終わり、受口状を呈する。口縁部の内面は横方向のヘラミス キ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。口縁端部の内外面はヨ コナデを施す。	Î	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)	1	

表13 出土遺物観察表(4)

衣口	О Щ.				r			
遺物番号 図番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
44	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	口径 12. 2	口縁部は直線的に上外方へ伸びる。端部は丸く終わる。口縁部 の内面はヨコナデ、外面は左上がりのハケナデ後ヨコナデを施 す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃む を多く含む 生駒西麓産)		
45	S D 230	弥生土器 壺 口縁部		直立する頸部。頸部の内面はユビナデを施す。外面は縦方向の ヘラミガキを施す。内面には粘土接合の痕跡がある。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mmの砂粒を含む。(角閃含む を多く含む生駒西麓産)		
46	S D 230	弥生土器 壺 口縁部		口縁部は直線的に上外方へ伸びる。体部は球形になると思われる。口縁部の内面は縦方向のヘラミガキのちユビナデ、外面は縦方向のハケナデ後ヘラミガキを施す。体部の内面はユビナデ、外面は縦方行のヘラミガキを施す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
9	S D 230	弥生土器 壺 口縁部		底部は突出する平底である。体部は縦長の器形で、体部最大径は上位にある。体部の内面はユビナデとハケナデを施す。外面は縦方向のヘラミガキを施す。				
48	S D 230	弥生土器 壺 口縁部	底径 4.6	底部は突出する上げ底である。体部の内面はナデを施し、内面 の底部にはヘラ状工具による圧痕がある。外面はヘラミガキの ちユビナデを施す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
9	S D 230	壺	体部最大	底部は突出する平底である。体部は横長の球形である。底部、体部の内面はユビナデを施す。底部にはヘラ状工具による圧痕がある。底部〜体部の外面はユビナデを施す。	!	1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
50	S D 230	壺	体部最大	底部は突出する平底である。体部は横長の球形である。底部〜 体部の内面はユビナデ、外面はヘラミガキを施すと思われる が、表部磨耗のため調整は不明瞭である。	7.5YR4/3 褐色	1 ~ 3 mmの砂 粒 を含む。(角閃石を多く含む 生駒西麓産)		
51	S D 230	弥生土器 壺 体部	体部最大 径21.7	浅い体部下位から屈曲し内湾する上位に至る。口縁部は欠損しており不明である。体部の内面はハケナデのちユビナデを施す。体部の下位はハケナデのち板ナデを、上位はハケナデのちユビナデを施す。体部内面に粘土接合の痕跡がある。また、外面の屈曲部に粘土の凸帯を施す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
52 9	S D 230	甕	器高 17.9 底径 5.0 体部最大 径15.5	底部は突出する上げ底である。縦長の器形で体部の最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデを施し、ヘラ状工具による圧痕と粘土接合の痕跡がある。体部の下位〜中位の外面は右上がりのタタキのち縦方向のハケナデを施し、タタキはハケナデにより消されている。体部の上位は右上がりのタタキを施す。底部の内外面はユビナデを施し、指頭圧の痕跡がある。体部の中位の外面には煤が付着している。また、中位には焼成後に1ヶ所の孔があけられている。		1 ~ 4 mmの砂 粒 を 含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)	良好	
53	S D 230	甕		口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は面を形成する。 口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビナデを施 し、粘土接合の痕跡がある。体部の中位の外面は右上がりのタ タキのち縦方向のハケナデを施し、タタキはハケナデにより消 されている。上位の外面は右上がりのタタキを施し、粘土接合 の痕跡がある。体部の中位の外面には煤が付着している。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)	良好	
54	S D 230	甕	体部最大	口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部はつまみ上げ丸く 終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面はユビ ナデを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。体部の外面は右上 がりのタタキを施す。体部〜口縁部の外面には部分的に黒斑が ある。	色	1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		

表14 出土遺物観察表(5)

表14	· 出コ	-遺物観	祭表(5)					
遺物 番号 図番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
55 9	S D 230	甕 口縁~底 部	器高 13.3 底 径 3.4 体部最大 径12.6	底部は突出する平底である。縦長の器形で体部の最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内面はヨコナデ、外面は右上がりのタタキのちョコナデを施す。体部の内面はユビナデを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。体部の外面は右上がりのタタキを施す。底部の内外面はユビナデを施し、指頭圧の痕跡がある。	橙色	1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)	良好	
56	S D 230	弥生土器 甕 底部		底部は突出する平底である。体部中位以上は欠損しているため、形状は不明である。体部の内面はハケナデを施す。体部の外面は右上がりのタタキを施す。底部の内外面はユビナデを施し、指頭圧の痕跡がある。体部の外面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
57	S D 230	弥生土器 甕 口縁部		口縁部は外反する。端部は下方へつまみ出し面を形成する。口 縁部の内外面はヨコナデを施す。体部内面はユビナデ、外面は 右上がりのタタキを施す。		1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
58 9	S D 230	甕	体部最大 径 18.0	体部は縦長の器形になると思われる。口縁部は屈曲し外反する。端部は下方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面は ヨコナデを施す。体部の内面は左上がりのハケナデ、外面は右 上がりのタタキを施す。タタキの角度は下位と上位で異なる。 体部の内外面には粘土接合の痕跡がある。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
59	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大 径 17.2	体部は縦長の器形になると思われる。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内面はヨコナデ、外面は右上がりのタタキ後ヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面は右上がりのタタキを施す。	色	砂粒を含む。		
60	S D 230	弥生土器 甕 / 口縁部	口径 16.6	口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は面を形成する。 口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は左上がりの板 ナデを、外面は右上がりのタタキ後左上がりのハケナデを施 す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
61 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大	縦長の器形で体部の最大径は上位にある。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。口縁部の内面には粘土接合の痕跡がある。体部の内面はハケナデを施し、粘土接合の痕跡がある。体部の下位の外面は右上がりのタタキを施す。中~上位は右上がりのタタキのちユビナデを施し、タタキはユビナデにより消されている。体部の中位の外面には部分的に黒斑がある。また、中位には焼成後に孔が2ヶ所あけられている。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
62	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大	口縁部は屈曲し外反する。端部は面を形成する。体部の内面は ユビナデを施す。内面には粘土接合の痕跡がある。外面は右上 がりのタタキを施す。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。 体部中位の外面には、煤が付着している。		1 ~ 3 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
63	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 15.6	体部は縦長の器形になると思われる。口縁部は屈曲し外反する。端部は丸く終わる。口縁部の内外面はヨコナデを施す。外面には粘土接合の痕跡がある。体部の内面は横方向と左上がりのハケナデ、外面は右上がりのタタキを施す。体部の中位の外面には煤が付着している。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
64 9	S D 230	弥生士器 甕 完形	器高 32.7 底径 5.3 体部最为 径 25.5	底部は突出する上げ底である。体部は縦長の器形である。口縁 部は屈曲し外反する。端部は丸く終わる。体部の内面はユビナ デを施す。内面には粘土接合の痕跡がある。外面は基本的に右 上がりのタタキを施す。タタキの方向は下位、中位、上位で少 し角度がが変わる。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体 部中位の外面には、煤が付着している。	色 外面10YR4/6 褐色	1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
65 9	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大 径 19.9	体部は縦長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反す る。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。 体部の内面は左上がりのハケナデを、外面は右上がりのタタキ を施す。体部の中位の外面には煤が付着している。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
66 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	口径 17.0	体部は縦長の器形になると思われる。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。端面には凹線文を施す。体部の内面はハケナデを、外面は左上がりのタタキを施す。口縁部の外面には部分的に煤が付着している。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		

表15 出土遺物観察表(6)

表15		上遺物観	7.32	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1			
遺物番号 図版番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
67 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部		口縁部はゆるやかに曲がり外反し、段を有する。端部はつまみ上げ面を形成する。口縁部の内外面はヨコナデを施す。体部の内面は横方向の粗いハケナデを施す。体部の外面は右上がりのタタキを施す。口縁部の内面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
68 10	S D 230	弥生土器 甕 口縁部	体部最大	体部は縦長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上方につまみ出し面を形成する。口縁部の内外面は ヨコナデを施す。体部の内面はユビナデ、外面は右上がりのタ タキを施す。体部の下~中位の外面には煤が付着している。		1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
69 10	S D 230	弥生土器 甕 完形	器 高 30.85 底径 5.9	底部は突出する平底である。体部は縦長の器形である。口縁部は「く」の字に屈曲し外反する。端部は上下に拡張し面を形成する。体部の内面はヘラケズリを、外面は上位が左上がり、下位が縦方向のハケナデを施す。口縁端部には凹線文を施す。底部の内面に黒斑がある。		1 ~ 3 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む)		東四国V 一3 様 の 搬 の 搬 か?
70 10	S D 230	鉢 口縁部		体部は内湾し、口縁部は屈曲し外反する。端部はつまみ上げ面 を形成する。口縁部の内面および体部の内面はヘラミガキを右 上がりに施す。口縁部の外面と体部上位の外面はヘラミガキを 右上がりに施す。口縁部の外面および体部の外面には粘土接合 の痕跡がある。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
71	S D 230	弥生土器 鉢 底部	底径 4.2	底部は突出する上げ底である。体部は直線的に上外方に伸びる 縦長の器形である。口縁部は屈曲し外反すると思われる。口縁 部の内外面はヨコナデを施す。体部および底部の内外面はユビ ナデを施す。底部の内外面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
72 10	S D 230	弥生土器 有孔鉢 底部	底径 3.8	底部は平底である。体部はややふくらみをもち上外方に伸びる 器形である。口縁部は欠損している。底〜体部の内面はユビナ デを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。底〜体部の外面は右 上がりのタタキ後ハケナデを施し、最終的にユビナデによりタ タキとハケナデは消されている。底部には孔があけられてい る。		1~4 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
73	S D 230	弥生土器 有孔鉢 底部	器高 9.2 底径3.4	底部は突出する平底である。体部は直線的に上外方に伸びる器形である。口縁部は尖りぎみに丸く終わる。底〜体部の内外面はユビナデを施す。内面にはヘラ状工具による圧痕がある。底部には孔があけられている。体部の内外面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
74	S D 230	弥生土器 高杯 杯部		口縁部は浅い杯底部から屈曲し外反する。端部は丸く終わる。 口縁部の内面は縦方向にヘラミガキを施すと思われるが表部 は磨耗しており不明瞭である。外面は凹線文を3条施す。杯部 の内面は左上がりのヘラミガキを施す。外面は放射状にヘラミ ガキを施す。口縁部~杯部の内面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
75	S D 230	弥生土器 高杯 杯部		口縁部は浅い杯底部から屈曲し外反する。端部は面を形成する。口縁部の内外面はヘラミガキを左上がりに施す。杯部の内外面は放射状にヘラミガキを施す。杯〜口縁部の内面には部分的に黒斑がある。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
76	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部		口縁部は浅い杯底部から屈曲し外反する。端部は面を形成する。短い脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。口縁部の内面はヘラミガキを横方向に分割して施す。外面はヘラミガキを左上がりに施す。杯部の内外面は放射状にヘラミガキを施す。脚部の内面にはしぼり目がある。外面は縦方向のミガキを施す。脚〜裾部に3方向のスカシ孔があけられている。杯〜口縁部の内面には部分的に赤色顔料を塗布している。		1~3mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)	良好	
77 11	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部	24. 05	口縁部は浅い杯底部から屈曲し外反する。端部は丸く終わる。 直立する脚部が付く。裾部は欠損しているが、「ハ」の字に開 くと思われる。。口縁部と杯部の内面はヘラミガキを施すと思 われるが、表部磨耗のため不明稜である。口縁部の外面は縦方 向のハケナデのちョコナデを施す。杯部の外面はハケナデのち ヘラミガキを左上がりに施す。脚部の内面にはしぼり目があ る。外面は縦方向のミガキを施す。脚〜裾部に3方向のスカシ 孔があけられている。		1~2 mmの 砂 粒 を 含む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)	良好	
78 11	S D 230	弥生土器 高杯 杯~脚部	口径 17.1	口縁部は浅い杯底部から屈曲し外反する。端部は丸く終わる。 短い脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。口縁部および杯部 の内外面はヘラミガキを施すと思われるが、表部磨耗のため不 明瞭である。脚部の内面はしぼり目あり。外面は縦方向のミガ キを施す。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		

表16 出土遺物観察表(7)

表16	- 出土	上遺物観察	察表(7)	1,000				
遺物 番号 図 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
79	S D 230	弥生土器 高杯 脚~裾部		中空の脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。杯部の外面および脚部、裾部内外面はヘラミガキを施すと思われるが、表部磨 耗のため不明瞭である。脚部の内面はしぼり目あり。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
80	S D 230	弥生土器 高杯 脚~裾部		やや短い脚部が付き、裾部は「ハ」の字に開く。裾端部は面を 形成する。杯部の内面はユビナデを施す。外面は放射状にヘラ ミガキを施す。脚部の内面にはしぼり目がある。外面は縦方向 のミガキを施す。脚〜裾部に3方向のスカシ孔があけられてい る。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		1
81	S D 230	弥生土器 高杯 裾部		裾部は「ハ」の字に開く。端部は面を形成する。裾部の内面は ユビナデ、外面は細かいハケナデを施す。端部には凹線文を有 する。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
82	S D 230	弥生土器 高杯 裾部		裾部は「ハ」の字に開く。端部は面を形成する。裾部の内外面 はハケナデを施す。内面には粘土接合痕がある。端部には凹線 文を有する。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
83	S D 230	器台 受部		受部は直線的に上外方に伸びる。端部は下方に拡張し面を形成 する。受部の内外面は放射状のヘラミガキを施す。端面には波 状文を施す。		1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
84	S D 230	弥生土器 器台 脚~裾部		「ハ」の字に広がる裾部。端部は面を形成する。脚部は直線的に上外方に伸び、受部は外反して上外方へ伸びる。裾端部の内面はヨコナデを、裾部の内面はハケナデを施す。裾部の外面はヘラミガキを施す。脚部の内面はユビナデを施し、ヘラ状工具による圧痕がある。脚部の外面は左上がりのハケナデを施す。裾部と脚部の境と脚部の中位には3方向のスカシ孔があけられている。	褐色	1 ~ 3 mmの砂粒を含む。(角閃石を多くを動西麓産)		
85	S D 230	弥生土器 器台 脚~裾部	裾径 15.6	「ハ」の字に広がる裾部。端部は上方につまみ出し面を形成する。脚部は直線的に上外方に伸びる。裾端部の内面はヨコナデを、脚部の内面はユビナデを施す。裾〜脚部の外面は縦方向のヘラミガキを施す。裾部と脚部の境と脚部の中位には3方向のスカシ孔があけられている。裾〜脚部の外面には部分的に黒斑がある。		1~3mmの 砂粒を含む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
86	S D 230	弥生土器 器台 裾部		筒状の脚部である。裾部はゆるやかに「ハ」の字に広がる。受部は屈曲し上外方に広がる。受部および脚部の内面はユビナデを、外面は縦方向のミガキを施す。脚部にはスカシ孔が5箇所あけられている。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃含む を多く含む 生駒西麓産)		
87 11	S D 230	弥生土器 手焙形土 器 覆~体部	19.85 体部最大	底部は欠損している。体部は横長の球形で、下位と口縁部に突帯を1条施す。覆部はやや丸みを持つが、直線的に上内方に伸びる。開口部は覆部の端にあり、端部は上方につまみ出し丸く終わる。体部の内面は板ナデ、外面はヘラミガキを施す。覆部の内面はユビナデを施し、粘土接合の痕跡がある。覆部の外面はヘラミガキを施す。		1 ~ 2 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
88	S D 230	弥生土器 ミニチュ ア土器 体〜底部		底部は上げ底である。体部は球形である。口縁部は欠損している。底~体部の内外面はユビナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		The state of the s
89	S D 230	弥生土器 ミニチュ ア土器 完形	器高 6.9 底径 3.4 体部最大 径 6.9	底部は突出する上げ底である。体部は直線的に上外方に伸びる 器形である。口縁部は外反し、端部は尖りぎみに丸く終わる。 底~口縁部の内外面はユビナデを施す。体部の内外面には部分 的に黒斑がある。		1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
S 1	S D 230	砥石	最大長 10.0 最大幅 8.15 厚み 7.1	形状は不定形である。使用したと思われる平らな面が4面認められた。				

表 17 3 区第 3 面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S P313	4 C	円形	_	_	0.5	皿状形		10YR5/1 褐灰色細 粒シルト混粘土	なし
S P 314	4 C	円形	_		0.8	皿状形	4	10YR5/1 褐灰色細 粒シルト混粘土	なし

表18 3区第3面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 302	4 C • D	東西方向にやや蛇行し伸び る。	0, 7	逆台形	0. 17	10YR2/1 黒色細粒砂混粘土	なし
S D 303	3 · 4C · D	東西方向に直線に伸びる。	2. 3	逆台形		10YR6/1 褐灰色細粒砂〜細粒シルト ラミナ構造 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂混粘土	なし

第4面

弥生時代後期前葉以前の河川1条(NR401)を検出した。

N R 401

3・4 C・D区で検出した。平面形状は南東-北西方向に直線に伸び、幅は4.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.4mを測る。埋土は10YR7/1灰白色粗〜細粒砂で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

3層からは弥生土器、須恵器、瓦質土器、磁器などの破片が出土したが、図化できるものはなかった。

4区

第1面

平安~鎌倉時代の溝9条(SD101・102・134~140)を検出した。

S D 101 · 102 · 134~140

SD101・102・134~140は調査区の全域で検出した。SD101・102・134・135・137~139は東西方向に、SD136・140は南北方向に伸びる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられる。SD101・102・134~136・140からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。このうち図化したものは、SD134の90、SD140の91である。

 $90 \cdot 91$ は平安~鎌倉時代に比定できる土師器の小皿である。なお、 $SD101 \cdot 102$ の詳細は表 1、その他の各溝の詳細は表 19、出土遺物の詳細は表 22にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑 2 基 (S K 202・203)、小穴 5 個 (S P 201~205)、溝 4 条 (S D 234~237) および 平安時代の溝 4 条 (S D 202・231~233)を検出した。

SK202 · 203

SK203は**4区**と**5区**で検出した。**SK202・203**からは弥生土器が出土した。このうち図化した ものは、**SK202**からの弥生時代後期(河内V-3様式)に比定できる**92~95**である。

92はの長頸壺で、頸部の外面にはヘラ記号を施す。93は小型の壺。94は壺の底部と思われる。

底部は「ハ」の字に開く上げ底である。95は甕で、口縁部は受口状を呈す。体部外面の下位、中位、上位にはそれぞれ角度の違う右上がりのタタキを施しており、分割成形を行ったことがわかる。なお、各土坑の詳細は表20、出土遺物の詳細は表22にまとめた。

$SP201\sim205$

SP201~205は北部で検出した。**SP203・204**からは弥生土器が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各小穴の詳細は**表21**にまとめた。

S D 202 ⋅ 231~237

S D 202・231~233は南部で、S D 234~237は北部で検出した。S D 235からは弥生土器が出土した。このうち図化したものは、S D 235の弥生時代後期(河内 $V-3\sim VI-1$ 様式)に比定できる96~99である。96はの壺の口縁部で、端面には凹線文を施したのち、円形竹管を押した円形浮文が等間隔に貼り付ける。河内V-3に比定できる。97・98は壺。97は体部と頸部の境のくびれが不明瞭なもので、河内VI-1様式に比定できる。99は鉢で、外反する口縁をもつ。なお、S D 202の詳細は表 2、S D 231~237の詳細は表 23、出土遺物の詳細は表 22にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の河川1条(NR301)および古墳時代後期の溝1条(SD304)を検出した。

表19 4区第1面溝一覧表

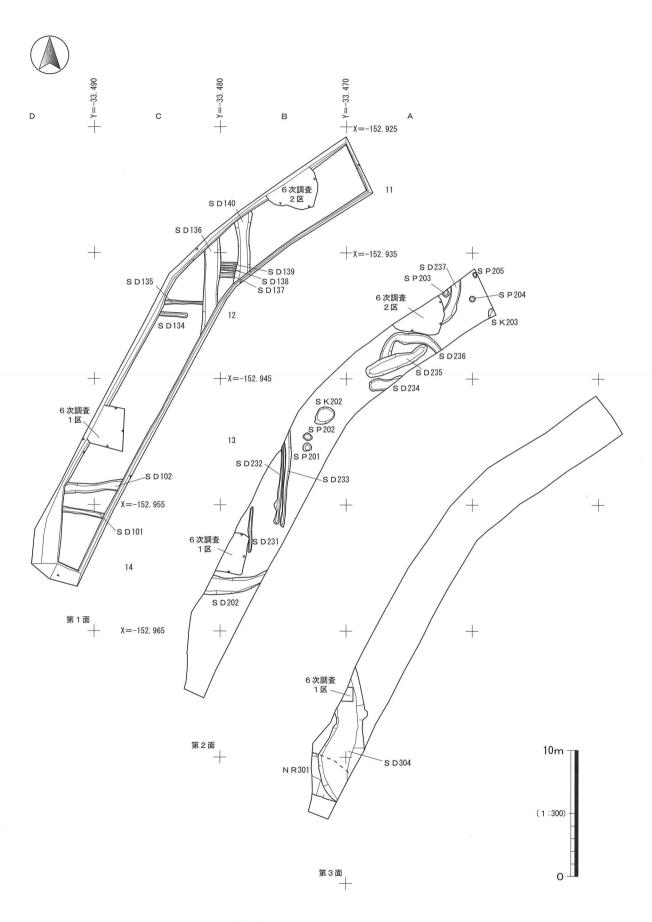
32.10	//	4/17 3634						
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)		埋土	出土遺物
S D 134	12C	東西方向に直線に伸びる。	0, 2	皿状形	0.5	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	土師器、須恵器
S D 135		東西方向に直線に伸びる。 S D136 に切られる。	0.35	皿状形	0.5	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	土師器、瓦質土器
S D 136		南北方向に直線に伸びる。S D135・137~139 を切る。	1.3	逆台形	0. 1	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	土師器、須恵器
S D 137		東西方向に直線に伸びる。 S D136・140 に切られる。	0.4	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	なし
S D 138		東西方向に直線に伸びる。 S D136・140 に切られる。	0. 25	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	なし
S D 139		東西方向に直線に伸びる。 S D136・140 に切られる。	0.3	逆台形	0.1	N4/0	灰色細粒~粗粒砂	なし
S D 140	11 · 12B	南北方向に直線に伸びる。 S D137~139 を切る。	0.8	皿状形	0.1	N4/0	灰色細粒砂混粗粒砂	土師器、須恵器

表 20 4 区第 2 面土坑一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S K 202	12C	円形	_	_	1.4	逆台形		10YR2/1 黒色細粒 砂混粘土	弥生土器
S K 203	11A	半円形		_	0.6	逆台形		10YR2/1 黒色細粒 砂混粘土	弥生土器

表 21 4 区第 2 面小穴一覧表

遺構番号	地区	平面形状	長径 (m)	短径 (m)	径(m)	断面形状	深さ (m)	埋土	出土遺物
S P 201	12C	円形	_	_	0.6	逆台形		N2/0 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P 202	12C	円形			0. 7	皿状形		N2/0 黒色細粒砂 混粘土	なし
S P 203	11B	円形	_	_	0. 45	逆台形	0. 1	N2/0 黒色細粒砂 混粘土	弥生土器
S P 204	11A • B	円形		_	0. 5	逆台形	0. 2	N2/0 黒色細粒砂 混粘土	弥生土器
S P 205	11A	円形	_	_	0.3	逆台形	0. 08	N2/0 黒色細粒砂 混粘土	なし



第14図 4区第1~3面平面図

表22 出土遺物観察表(8)

表22	: ДЗ	上遺物観響	祭衣(8)					
遺物 番号 図 番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
90	S D 134	土師器 小皿 口縁部		口縁部は外反する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内 外面はヨコナデを施す。口縁の内外面の一部には煤が付着して いる。	10YR8/1 灰白色	1 mm 程度の砂粒を含む。	良好	
91	S D 140	土師器 皿 口縁部		口縁部は内湾する。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内 外面はヨコナデを施す。口縁の内外面の一部には煤が付着して いる。		1 mm 程度の砂粒を含む。	良好	
92	S K 202	弥生土器 壺 口縁部	口径 15.4	頸部は直立する。口縁部は外反し端部は丸く終わる。口縁部の 内外面はヨコナデを施す。頸部の内面は横方向のハケナデ、外 面は縦方向のハケナデを施す。頸部の外面にはヘラ記号があ る。		1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
93	S K 202	弥生土器 壺 口縁部	口径 10.2	頸部は直立しやや外へ開く口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁部の内外面はヨコナデを施す。頸部の内面は縦方向のヘラミガキ、外面は縦方向のハケナデを施す。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
94	S K 202	壺 底部		底部は「ハ」の字に開く上げ底である。端部は丸く終わる。体部の内外面はハケナデを施す。体部の外面にはヘラ状工具による圧痕がある。底部の内外面はユビナデを施す。		1 ~ 3 mmの砂粒を含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
95 12	S K 202	弥生土器 甕 完形	器高 21.9 底頸 4.8 体部最大	底部は突出する上げ底である。体部は縦長の器形である。口縁 部は屈曲し外反し、上方につまみ出す。端部は丸みのある面を 形成する。底部の内外面はユビナデを施す。体部の内面はハケ ナデを施し、粘土接合の痕跡がある。外面は右上がりのタタキ を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデを施す。体部中位の外面には、煤が付着している。底部の外面には部分的に黒斑がある。	褐色	1 ~ 3 mm の 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
96 12	S D 235	弥生土器 壺 口縁部	口径 18.3	頸部は直立する。口縁部は直線的に上外方に伸びる。端部は下方に拡張し、面を形成する。口縁部の内外面は横方向のヘラミガキを施す。頸部の内外面は縦方向のヘラミガキを施す。端面には凹線文を施したのち、円形竹管を押した円形浮文が等間隔に貼り付けられている。		1 ~ 5 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
97	S D 235	弥生土器 壺 口縁部	口径 11.6	頸部は直立しやや外へ開く口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸 く終わる。口縁部および頸部の内外面はヨコナデを施す。体部 の内外面はハケナデを施す。	i	1 ~ 3 mmの砂 粒 を 含む。(角閃石を多く含む生駒西麓産)		
98	S D 235	弥生土器 壺 底部	底径 4.8	底部は突出する上げ底である。体部および底部の内外面はユビナデを施す。	7.5YR5/6 明褐色	1 ~ 2 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
99	S D 235	弥生土器 鉢 口縁部	口径 13.2	体部は内湾する。口縁部はやや外反し、端部は面を形成する。 体部の内外面はユビナデを施す。口縁部の内外面はヨコナデを 施す。		1 ~ 3 mmの砂 粒 を 含む。(角閃石を多く含む 生駒西麓産)		

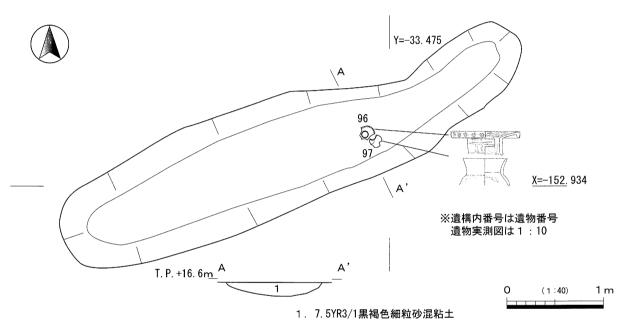
表23 4区第2面溝一覧表

衣とい	+ 区弗乙酯	山海一見衣					
遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 231	13C	南北方向に直線に伸びる。	0.3	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	なし
S D 232	12 · 13C	南北方向に直線に伸びる。	0. 2	皿状形	0.05	5Y4/1 灰色粗粒砂	土師器、須恵器
S D 233	12 · 13C	南北方向に直線に伸びる。	0. 25	皿状形	0.1	5Y4/1 灰色粗粒砂	なし
S D 234	11 · 12B	東西方向に直線に伸びる。	0. 9	皿状形	0.07	7.5YR3/1 黒褐色細粒砂混粘土	弥生土器
S D 235	11B	東西方向に伸び	1.0	皿状形	0.13	7.5YR3/1 黒褐色粗粒砂混粘土	弥生土器
S D 236		北東~南西方向に弧状に伸び					弥生土器
	11B	る。	0.8	皿状形	0.09	7.5YR3/1 黒褐色粗粒砂混粘土	
S D 237	11B	南北方向に弧状に伸びる。	0. 7	逆台形	0.15	7.5YR3/1 黒褐色粗粒砂混粘土	弥生土器

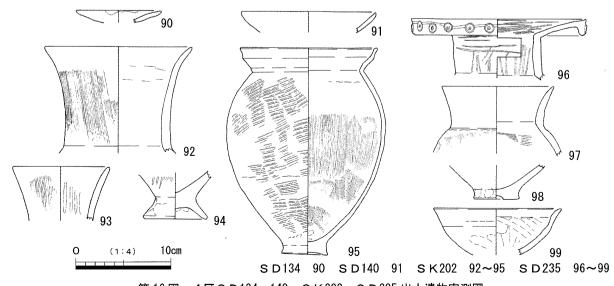
S D 304

N R 301

13D 14C・D地区で検出した。南東〜北西方向に伸び、幅0.3mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.5mを測る。埋土は7.5YR6/1褐灰色細中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。なお、この遺構は**1区**でも検出している。



第15図 4区SD235平·断面図



第 16 図 4 区 S D 134・140、 S K 202、 S D 235 出土遺物実測図

5区

第1面

平安~鎌倉時代の溝15条(SD141~155)を検出した。

$s D141 \sim 155$

SD141~146は南部で、SD147~155は北部で検出した。SD141・142・144・145・147・148・150・152~154からは土師器、須恵器、瓦質土器の破片が出土した。このうち図化したものはSD142の100、SD144の101、SD147の102である。

100は鎌倉時代初頭頃の土師器小皿である。101は鎌倉~室町時代の瓦器椀である。102は平安~ 鎌倉時代の瓦器椀である。なお、各溝の詳細は表24、出土遺物の詳細は表26にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑1基(SK204)、溝2条(SD238・239)を検出した。

S K 204

9 A地区で検出した。検出した平面形状は半円形で、幅1.6mを測る。断面状は逆台形で、深さ 0.2mを測る。埋土は10YR2/1黒色細粒砂混粘土で、弥生土器、土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。

表24 5区第1面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 141	8~11A	南北方向に直線に伸びる。 S D145・146 を切る。	1.7	逆台形	0. 2	N4/0 灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D142	11A	南北方向に直線に伸びる。 S D143 を切る。	0.6	逆台形	0, 25	N4/0 灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D143	11A	東西方向に直線に伸びる。S D142・144に切られる。	0.3	逆台形	0. 05	N4/0 灰色粗粒砂混粘土	なし
S D144	9∼11A	南北方向に直線に伸びる。 S D143・145・146を切る。	0.7	逆台形	0.1	N4/0 灰色細粒砂混粘土	弥生後期、土師 器、須恵器、瓦器
S D 145	10A	東西方向に直線に伸びる。 S D141・144 に切られる。	0, 25	逆台形	0.06	N4/0 灰色粗粒砂混粘土	土師器
S D146	9 · 10A	東西方向に直線に伸びる。S D141 と 144 に切られる。	0, 35	逆台形	0. 05	N4/0 灰色粗粒砂混粘土	なし
S D147	6 · 7A	南北方向に直線に伸びる。 S D148~152・154 を切る。	1.2	逆台形	0. 1	N4/0 灰色細粒砂混粘土	弥生後期、瓦器
S D 148	7 A	南西-北東方向に直線に伸びる。SD147に切られる。	0. 25	皿状形	0. 1	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	土師器、須恵器
S D149	7 A	南西-北東方向に直線に伸びる。SD147に切られる。	0. 25	皿状形	0. 1	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D 150	7 A	南西-北東方向に直線に伸びる。SD147に切られる。	1.0	皿状形	0.06	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	土師器
S D 151	7 A	南西-北東方向に直線に伸びる。SD147に切られる。	0, 25	皿状形	0. 05	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	なし
S D 152	6 · 7A	南西-北東方向に直線に伸びる。SD153を切る。SD147に切られる。		皿状形	0. 75	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	土師器
S D 153	6 A	南東-北西方向に直線に伸びる。SD152に切られる。	0.4	皿状形	0.05	N4/0 灰色細粒砂混粘土	弥生後期
S D 154	6 A • B	南北方向に直線に伸びる。 S D147 に切られる。	0.3	皿状形	0.06	10YR4/1 褐灰色細粒砂混粘土	土師器
S D 155	6 A • B	南北方向に直線に伸びる。	1.5	逆台形	0. 25	N4/0 灰色細粒砂混粘土	なし

表25 5区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 238	10A	南西〜北東方向に直線に伸び	1.1	皿状形	0.1	5YR3/1 黒褐色細粒砂混粘土	土師器
		る。					
S D 239	7 · 8A	東西方向に直線に伸びる。	2. 1	皿状形	0.15	7.5YR2/2 黒褐色粗粒砂混粘土	弥生土器

S D 238 · 239

SD238は南部で、SD239は北部で検出した。SD238・239からは、弥生土器、土師器の破片が出土した。このうち図化したものはSD239の弥生時代後期に比定できる103~107である。103は壺の体部で、外面に円形竹管文を施す。104は甕で、外面の下位と中位には角度が異なるタタキを施す。105は鉢で、底部は上げ底である。106は底部有孔鉢である。107は高杯の脚~裾部である。なお、各溝の詳細は表25に、出土遺物の詳細は表26にまとめた。

第3面

弥生時代後期前葉の河川3条(NR302~304)を検出した。

NR302 \sim 304

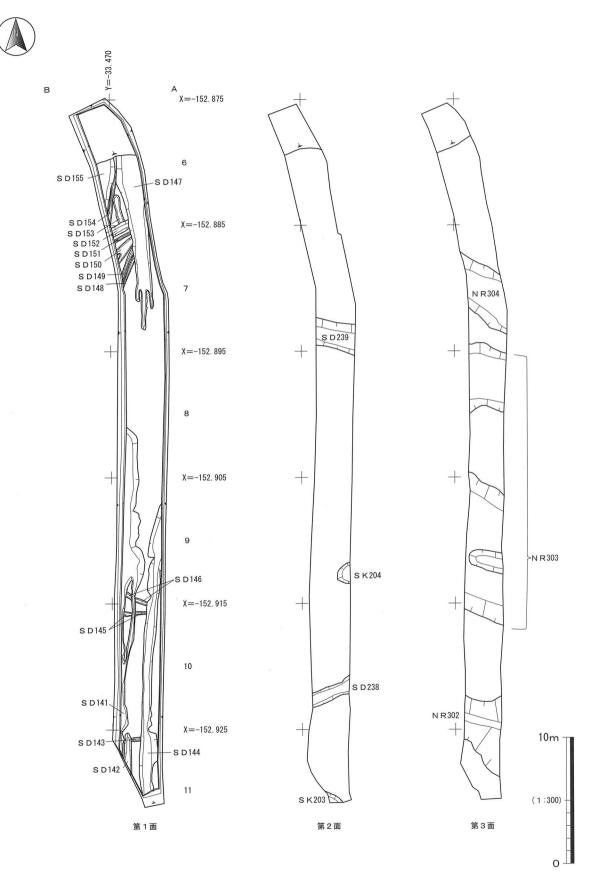
NR302・303は南東から北西方向に流れる。NR302・303は2区でも検出しており、詳細は表8に記載した。NR304は7A地区で検出した。南東から北西方向に直線に伸びる。幅は3.5mを測る。断面状は逆台形で、深さ0.8mを測る。埋土は10YR6/1褐灰色細~中礫混粗粒砂で、遺物の出土はなかった。

遺構に伴わない出土遺物

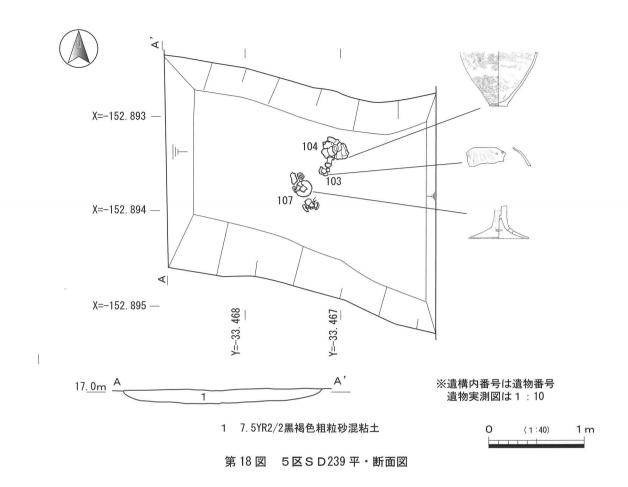
3層からは弥生土器、土師器、須恵器が、5層からは弥生土器、須恵器などの破片が出土した。 このうち図化したものは5層出土の弥生時代後期中葉に比定できる108である。108は高杯で、口 縁部は外反し、脚部は中空である。出土遺物の詳細は表26にまとめた。

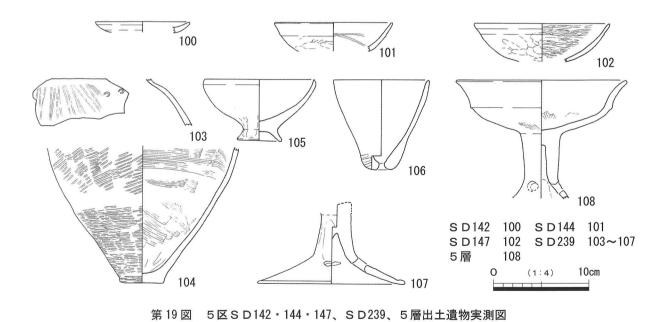
表26 出土遺物観察表(9)

表26) ш_	上遺物観	奈衣(9)					
遺物 番号 図番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
100	S D 142	土師器 小皿 口縁部		内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外 はヨコナデを施す。		1 mm 程度の 砂粒を含む。	良好	
101	S D 144	瓦器 椀 口縁部		内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外 はヨコナデを施す。体部の内面はヘラミガキを粗雑に施す。外 面はユビナデを施す。粘土接合痕がある。		$1 \sim 3 \mathrm{mm} \sigma$ 砂粒を含む。	良好	
102	S D 147	瓦器 椀 口縁部	口径 14.2	内湾する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終わる。口縁部の内外 はヨコナデを施す。体部の内面は横方向のヘラミガキを密に施 す。外面はユビナデを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。		
103 12	S D 239	弥生土器 壺 体部		体部の内面はナデを施し粘土接合の痕跡がある。外面は縦方向 のヘラミガキのち円形竹管文を施す。	7.5YR5/8 明褐色	1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
104 12	S D 239	甕 体~底部		底部は突出する平底である。縦長の体部になると思われる。体 部の内面はハケナデを施し、内面の底部にはヘラ状工具による 圧痕がある。外面はタタキを施す。体部中位には煤が付着して いる。		砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
105 12	S D 239	鉢	器高 6.5	底部は上げ底である。口縁部は内湾する浅い皿状の器形である。口縁部の内外面はヨコナデ。体部および底部内外面ユビナデを施す。		1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
106	S D 239	弥生土器 底部有孔 鉢 口縁~底 部		口縁部は直線的に上外方に伸びる。口縁部の内外面はヨコナデ。体部の内面はナデ。外面は右上がりのタタキを施す。底部には焼成前に孔があけられている。		1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
107 12	S D 239	弥生土器 高杯 脚~裾部	裾径 15.6	柱空の脚部から、裾部は「ハ」の字にひらく。脚部内面ユビナデ。外面縦方向のヘラミガキを施す。裾部内外面はハケナデと 思われるが、表部磨耗のため不明瞭である。裾部に4方向のスカシ孔があけられている。		1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
108 12	5層	弥生土器 高杯 杯~脚部		柱空の脚部から裾部は「ハ」の字にひらくと思われる。浅い杯部で、口縁部は外反する。脚部内面ユビナデ。外面縦方向のヘラミガキを施す。杯部の内外面はハケナデのちヘラミガキと思われるが、表部磨耗のため不明瞭である。口縁部の内外面はココナデを施す。脚部と裾部の間に3方向のスカシ孔がある。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		



第17図 5区第1~3面平面図





6区

第1面

平安~鎌倉時代の溝10条(SD156~165)、近世の河川1条(NR101)を検出した。

$SD156 \sim 165$

 $SD156\sim164$ は南部で検出した。また、SD165は北端で検出した。 $SD158\sim165$ は東西方向に、SD156と157は南北方向に伸びる。このうちSD158は研究会第8次調査のSD101と、SD159は同SD102と同一の遺構である。 $SD156\cdot157\cdot159$ からは弥生土器、土師器の破片が出土したが、図化できるものはなかった。なお、各溝の詳細は表27にまとめた。

N R 101

3・4 A・B地区で検出した。東西方向に直線に伸びる。幅は16.0mを測る。断面形状は逆台形で、深さ1.1mを測る。埋土は I 10Y5/1灰色細粒砂混粘土、Ⅱ5Y7/1灰白色細~中砂、Ⅲ10YR7/1灰白色細~粗粒シルト、Ⅳ5Y5/1灰色細~中礫、Ⅴ5Y5/1灰色細~粗粒砂で、縄文土器、土師器、須恵器の破片が出土した。このうち図化したものは109である。

109は縄文時代中期~後期の深鉢か浅鉢と思われる。外面には縄文と爪形文を施す。なお、出土遺物の詳細は表30にまとめた。

第2面

弥生時代後期中葉の土坑1基(SK205)、溝2条(SD240・241)を検出した。

S K 205

5 A・B地区で検出した。検出した平面形状は半円形で、径1.5mを測る。断面形状は逆台形で、深さ0.14mを測る。埋土は7.5YR2/1黒色細粒シルト混粘土で、出土遺物はなかった。

S D 240 · 241

S D 240・241は南部で検出した。S D 240からは弥生時代後期の遺物が出土した。このうち図化したものはS D 240の弥生時代後期中葉に比定できる110・111である。

110は壺、111は甕である。SD240は研究会第8次調査のSD302と同一の遺構である。なお、

各溝の詳細は表28、出土遺物の詳細は表30にま とめた。

第3面

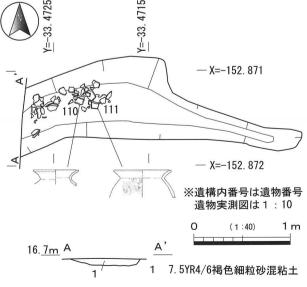
弥生時代後期前葉の溝 2条(SD305・306) を 検出した。

S D 305 · 306

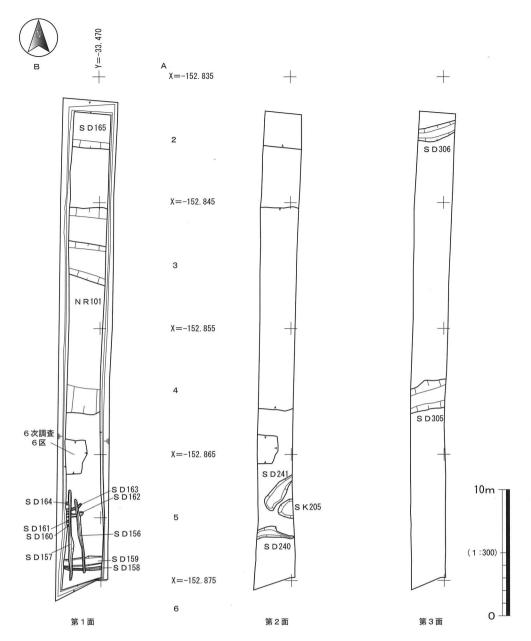
SD305は南部で、SD306は北端で検出した。 各溝からの出土遺物はなかった。なお、各溝の 詳細は表29にまとめた。

遺構に伴わない出土遺物

5層からは土師器、須恵器、黒色土器などの 破片が出土したが、図化できるものはなかった。



第20図 6区SD240平·断面図



第21図 6区第1~3面平面図

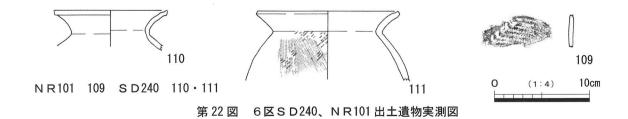


表27 6区第1面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)		埋土	出土遺物
S D156	5 A	南北方向に直線に伸びる。S D158・159・162・163 を切る。	0. 25	皿状形	0. 05	5Y7/3	浅黄色細粒砂混粘土	弥生土器、土師器
S D 157	5 A	南北方向に直線に伸びる。S D158~164を切る。	0.4	皿状形	0.05	5Y7/3	浅黄色細粒砂混粘土	土師器
S D 158	5 A · B	東西方向に直線に伸びる。S D156・157 に切られる。	0.2	皿状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D159	5 A • B	東西方向に直線に伸びる。S D156・157に切られる。	0.7	皿状形	0.07	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	土師器
S D160	5 A	東西方向に直線に伸びる。 S D157 に切られる。	0. 2	皿状形	0. 03	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D 161	5 A	東西方向に直線に伸びる。 S D157 に切られる。	0. 25	皿状形	0.03	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D 162	5 A	東西方向に直線に伸びる。 S D156・157 に切られる。	0.3	皿状形	0. 05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D163	5 A	東西方向に直線に伸びる。 S D156・157 に切られる。	0. 25	皿状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D 164	5 A	東西方向に直線に伸びる。 S D157 に切られる。	0. 2	皿状形	0.05	5Y6/1	灰色細粒砂混粘土	なし
S D 165	2 A • B	東西方向に直線に伸びる。	3.0以上	逆台形	0.5 以上	5Y6/1	灰色細~粗粒砂混粘土	なし

表28 6区第2面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)	埋土	出土遺物
S D 240	5 A • B	東西方向に直線に伸びる。	0.9	皿状形	0.05	7.5YR4/6 褐色細粒砂混粘土	弥生土器
S D 241	5 A • B	南北方向に直線に伸びる。	1.1	逆台形	0.15	7.5YR4/6 褐色細粒砂混粘土	なし

表29 6区第3面溝一覧表

遺構番号	地区	平面形状	幅(m)	断面形状	深さ(m)		埋土	出土遺物
S D 305	4 A • B	東西方向に直線に伸びる。	2. 0	逆台形	0, 25	10YR5/6	黄褐色粗粒砂混細礫	なし
S D 306	2 A • B	東西方向に直線に伸びる。	0. 9	逆台形	0.18	10YR6/1	褐灰色細粒砂	なし

表30 出土遺物観察表(10)

遺物 番号 阪番号	遺構	器種	法量 (cm)	形態·調整等	色調	胎土	焼成	備考
109 12	N R 101	縄文土器 深鉢か浅 鉢 体部		体部の内面はナデ、外面は縄文と爪形文を施す。	!	1 ~ 4 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		
110	S D 240	弥生土器 壺 口縁部	口径	口縁部は外反する。端部はつまみ上げ、面を形成する。口縁部 の内外面はヨコナデ、体部の内外面はナデを施す。		1 ~ 3 mm の 砂粒を含む。	良好	
111	S D 240	弥生土器 甕 口縁部	口径	口縁部は「く」の字に外反する。端部はつまみ上げ、面を形成する。体部の内面はナデを施す。外面は右上がりのタタキのちハケナデを施す。体部の中位には煤が付着している。		1 ~ 3 mmの 砂 粒 を 含 む。(角閃石 を多く含む 生駒西麓産)		

第2章 まとめ

第1面:調査地全域で検出した溝群(SD101~165)は、南北と東西方向に直線に伸びる形状で幅も狭く、深さも浅いことから、おそらく畑の畝溝であると思われ、今回の調査地は生産域であることが判明した。また、取水または排水の機能を持つと推測される河川NR101を6区の中央で検出した。

第2面:3区のSD230、4区のSD235、5区のSD239、6区のSD240からは弥生時代後期中葉に比定できる遺物が出土した。特にSD230からは、当時の日常生活に使用していたと思われる土器が折り重なるように多量に廃棄されていた。この面では、柱跡や井戸などの居住域を示す遺構の検出はなかったが、本調査地の近隣に同時期の居住域が存在していることが予想できる。また、4区の北東側のSD235周囲ではL字に曲がる溝や弧状に伸びる溝を検出しており、SD235からは、口縁部のみの壺が出土していることから、居住区以外の区域であった可能性が考えられる。

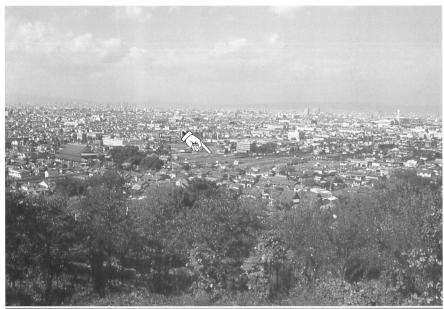
1区のSD301と4区のSD304は検出した場所が近接しており、同じ遺構であると考えられる。SD301からは、古墳時代後期の遺物が多く出土したが、この溝以外に同時代の遺構の検出および遺物の出土はなかった。本調査地の南西側約200m地点で研究会が平成2年度に行った郡川第2次調査では、古墳時代後期の遺物が出土した河川や同時期の遺物包含層を確認している(原田1999)。一方、北側約20m地点の平成15年度の調査(郡川遺跡2002-304)では、同時期の遺構、遺物の検出はなかった(岡田2004)。以上から、今回の調査地の南端で検出したSD301・304より南部に集落が広がっている可能性が高いと考えられる。

第3面:1区の北端と2区の南端で、弥生時代後期前葉に比定できる建物などの構築物に伴う 柱穴跡を密集した状況で検出した。柱列は南東-北西へ直線に伸びており、柱穴列の方向は若干 のずれがある。また、柱間は1.5mと1.7mに分かれるので、複数の構築物が建っていた可能性が ある。

参考文献

- ・寺沢 薫·森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編I』 木耳社
- ・菅原康夫·梅木謙一編著 2000『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
- ·原田昌則 1999『(財)八尾市文化財調査研究会報告64』「Ⅲ 郡川遺跡第2次調査(KR90-2)」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 2004「19 郡川遺跡(2002-304)の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49 八 尾市教育委員会
- ・西村公助 2008『郡川遺跡 第8次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告123 (財)八尾市文化財調査研究会

図 版



調査地遠景 【河内平野を望む 中央矢印が調査地】 (南東から)



調査地周辺 【中央は生駒山地】 (南西から)



調査前 【左上は生駒山地】 (北から)

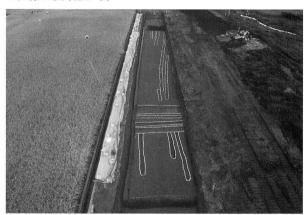




1区第2面(北から)



1区第3面(北から)



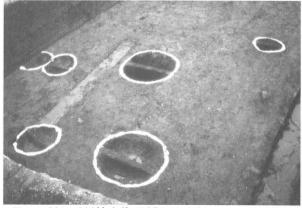
2区第1面(南から)



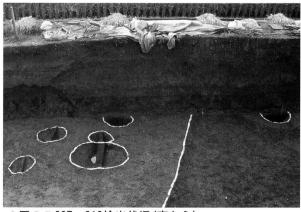
2区第2面(南から)



2区第3面(南から)



1区SP301~306検出状況(北西から)



2区SP307~312検出状況(東から)





3区第1面(南から)

3区第2面(南から)



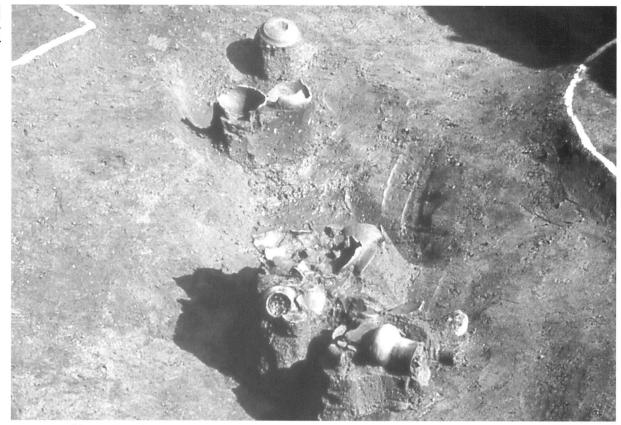
3区第3面(南から)



3区SD230調査状況(北東から)



3区SD230(南西から)



3区SD230遺物出土状況(南西から)



3区SD230遺物出土状況(南から)



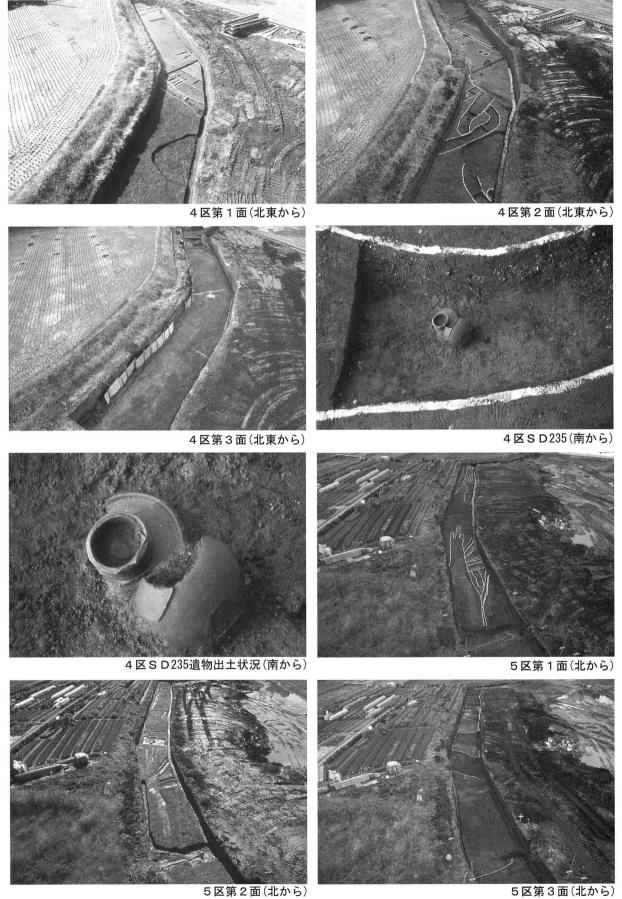
3区SD230遺物出土状況(南から)



3区第4面(南から)

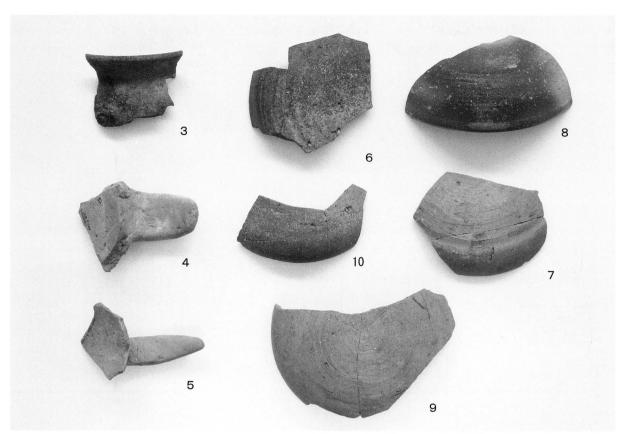


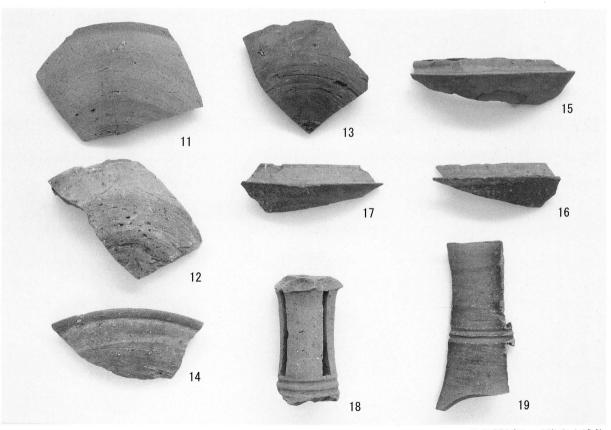
3区NR401(南東から)



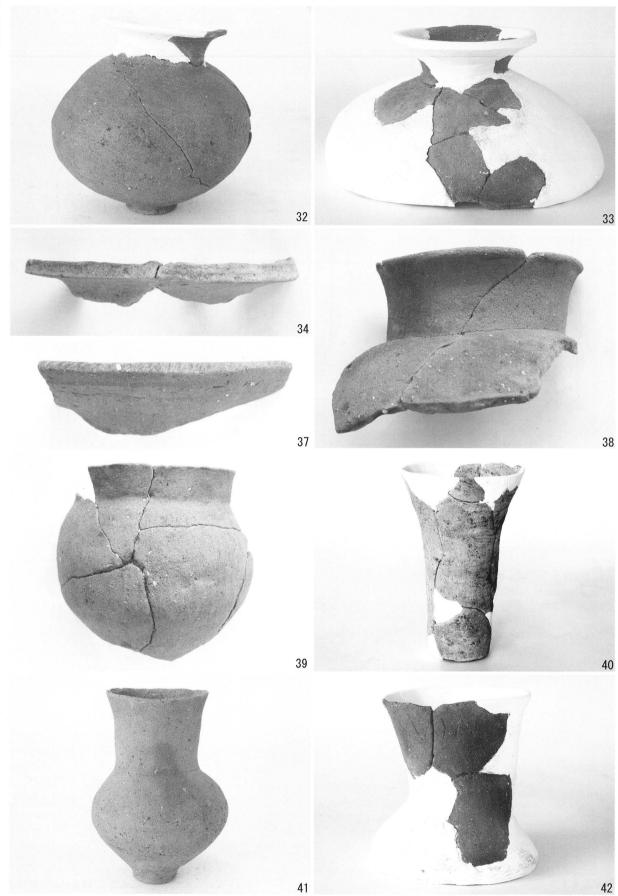
6区SD240遺物出土状況(東から)

6区SD240遺物出土状況(北から)

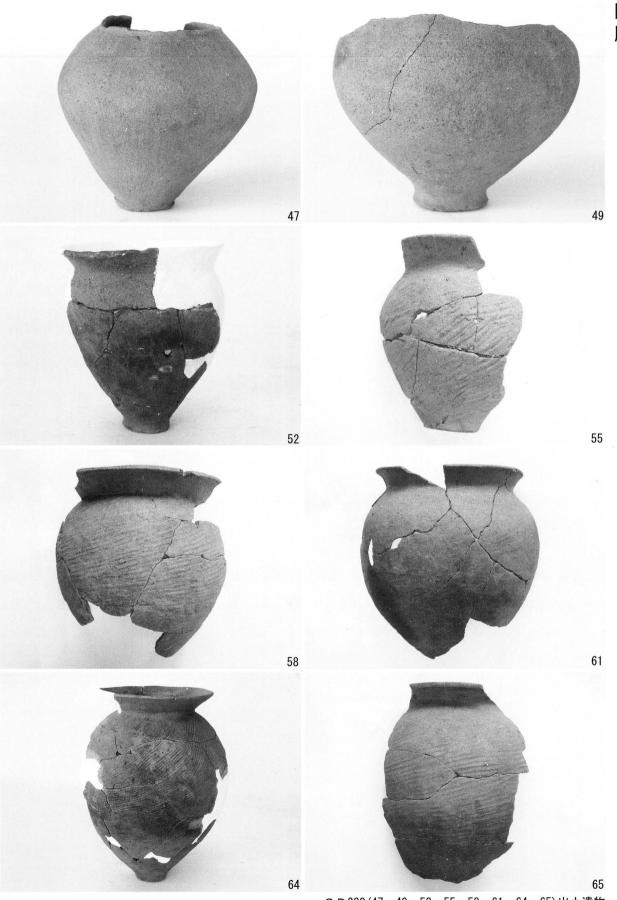




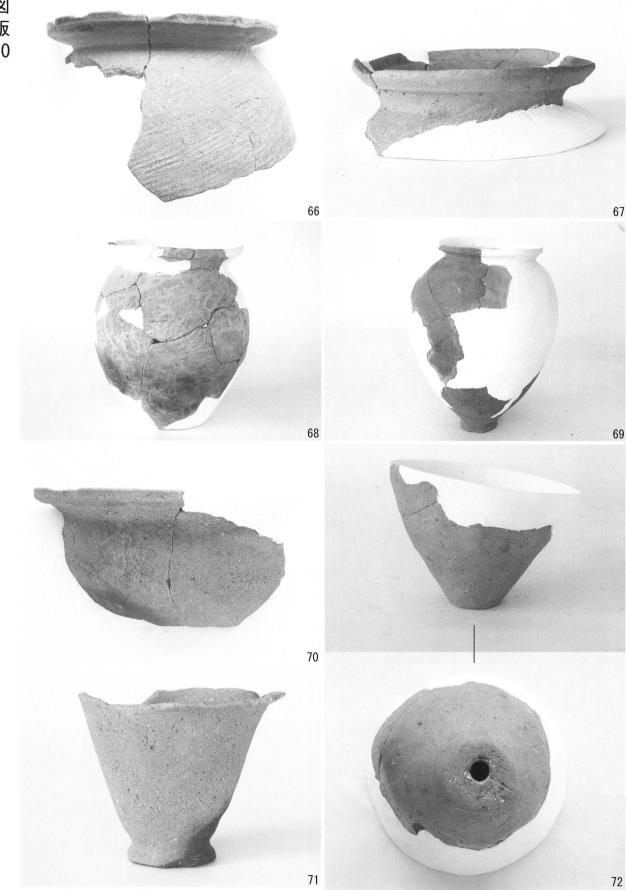
S D 301 (3~19) 出土遺物



SD230(32~34・37~42)出土遺物

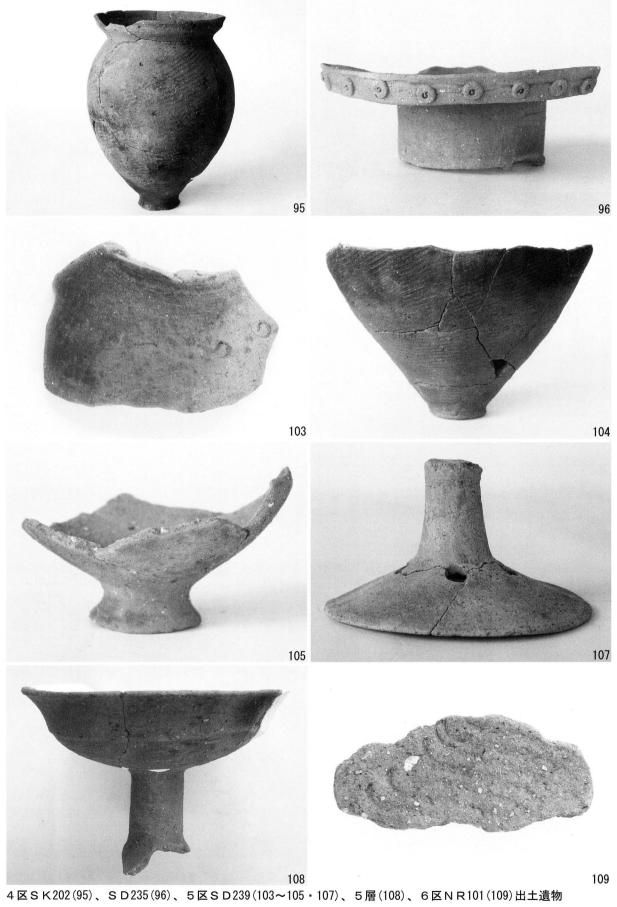


S D 230 (47・49・52・55・58・61・64・65) 出土遺物



S D 230 (66~72) 出土遺物

SD230(77・78・83・84・87)出土遺物



報告書抄録

ふりがな	こおりがわいせき だい6・7 じちょうさ
書 名	郡川遺跡 第6・7次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	125
編著者名	木村健明・成海佳子・西村公助
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2009年 3 月27日

まりがな 所収遺跡	* り が な 所 在 地		ード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査 原因
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第6次調査)	おおさかふやおしくろだに 大阪府八尾市黒谷一丁目	27212	60	34度37分 16秒	135度38分 06秒	20070423 ~ 20070427	約44	保育所 建設
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第7次調査)	おおさかふやおしくろだに 大阪府八尾市黒谷一丁目	27212	60	34度37分 16秒	135度38分 06秒	20070911 ~ 20071127	約851.2	保育所 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡川遺跡 (第6次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 奈良~平安時代	落込み 落込み 溝	弥生土器 土師器 須恵器 土師器 瓦器	
郡川遺跡 (第7次調査)	集落	弥生時代後期前葉以前 弥生時代後期前葉 弥生時代後期中葉 古墳時代後期 平安~鎌倉時代	河川 土坑 小穴 溝 河川 土坑 小穴 溝 溝 土坑 溝	弥生土器 弥生土器 土師器 須恵器 土師器 瓦器	

-			第6次調査では奈良~平安時代の溝と弥生~古墳時代の落込みを検出した。	
-	要	約	第7次調査では弥生時代後期前葉に比定できる柱穴跡を検出した。また、弥生時代後期中葉の溝には、多	7
			量の土器が廃棄されていることが判明した。	

(財)八尾市文化財調査研究会報告125

郡川遺跡

I 第6次調査 Ⅱ 第7次調査

発 行 平成21年3月

編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581−0821

大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2 TEL・FAX 072-994-4700

印 刷 株式会社熨斗秀興堂

〒577−0827

東大阪市衣摺5丁目20-10

TEL 06 (6727) 1166

表紙 レザック66 <260kg>

本文 ニューエイジ < 70kg>

図版 マットアート <110kg>

